

川上忠雄元常務理事オーラル・ヒストリー： 法政大学史資料集第40集

KAWAKAMI, Tadao / KITAGUCHI, Yumi / OKITA, Yoshifumi /
KOBAYASHI, Fumiko / UMEZAKI, Osamu / 川上, 忠雄 / 梅崎,
修 / 小林, ふみ子 / 沖田, 吉史 / 北口, 由望

(出版者 / Publisher)

HOSEIミュージアム

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

BULLETIN OF HOSEI UNIVERSITY MUSEUM / HOSEIミュージアム紀要

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

115

(終了ページ / End Page)

155

(発行年 / Year)

2022-03-09

III 資料編

法政大学史資料集

第40集

川上忠雄元常務理事オーラル・ヒストリー

目次

開催日 2021年9月8日

2022年3月

法政大学史委員会編集

『法政大学史資料集』は1978年3月に法政大学百年史編纂のため刊行がはじまり、大学の歴史に関する資料集として古い歴史があります。百年史完成後も大学史の解明のために刊行が継続され、2021年3月刊行の第39集以降は『HOSEI ミュージアム紀要』に収録されています。

解題

法政大学史委員会

梅崎 修

本オーラルヒストリーは、法政大学元常務理事、名誉教授の川上忠雄氏の法政大学における仕事史についての口述記録である。川上氏は、1959年に東京大学大学院経済学研究科の修士課程を修了された後に法政大学の助手（兼博士課程学生）として採用され、2004年に定年退職されるまでの長い間、法政大学において研究・教育、さらに大学運営に携わられた方である。特に教学改革における氏の貢献は大きい。それゆえ、1960年代—1990年代の法政大学の様々な教学改革について知るためには、本オーラルヒストリーは貴重な一次資料である。そこで本稿では、法政大学の教学改革史に沿いながら川上氏の口述記録の歴史的価値について述べたい。

第一に、1963年10月に発足した研究・教育体制懇話会があげられる。研究・教育体制懇話会は、経済学部の徳永重良氏と川上忠雄氏、経営学部の野田正穂氏、法学部の下森定氏などの若手教員が中心になって発足し、当時の法政大学の研究環境や教育環境の実態把握を行い、改革案を議論した。この懇話会は、三つの報告書を刊行しており、当時の劣悪な研究、教育環境を如何に改善していくかが議論されている。1960年代前半の教室の狭さやゼミナールの数の少なさなどの教員側から見た学生生活などは貴重な歴史情報と言えよう。この懇話会には、当時の若手教員たちが学部を越えて参加していたと言えよう。徳永氏は、その後東北大学に転職するが、川上氏、野田氏、下森氏は、その後の法政大学運営を支えられた方々である。

なお、研究・教育体制懇話会の活動を知るためには、まず、『法政大学研究条件白書—研究条件の現状と問題点』（1965年）、『法政大学教育白書 上』（1966年）、『法政大学の研究と教育（白書第3集）—現状分析とわれわれの提言』（1967年）という三つの報告書が基本文献になる。さらに本オーラルヒストリーや『HOSEI ミュージアム紀要』第一号に掲載されている下森定氏のオーラルヒストリーから当事者たちの経験を読み解くことができる。

第二に、キャンパスの多摩移転前後における経済学部での教学改革があげられる。川上氏は、多摩移転の直前に経済学部・学部長に就任している。『法政大学経済学部多摩移転二〇年史』（2008年）には、学部長としての川上氏が次のように位置付けられている。つまり、多摩移転は、新しく教育と研究が連携する場をつくる活動であったと言える。

「経済学部若手教員の間では、教学改革を実施するためには市ヶ谷地区では不可能であり、移転やむなしといった雰囲気生まれ、一九八一年度—八二年度の経済学部長にこれまで法政大学の教学改革に熱心に取り組んできた川上忠雄を選出した。（中略）川上学部長は、何より教学改革を重視し、多摩移転問題は単なる移転論であってはならず、教学改革の必要から論じられるべきであるとの信念を強く

持っていた。そして、川上学部長は、移転は教学改革を前提とするものであり、移転による教学改革の内容がどのようなものであり、また移転そのものの条件が何かについて教授会で議論を積極的におこし、かつ理事会、他学部との交渉をとおして、一九八二年九月六日に多摩移転を決定した。(pp.27-28)」

この時期、研究所の設置、教養課程と専門課程を分ける横割りから4年間を通じた学びを経済学部教授会が責任を持つという縦割りの授業科目の設置などが検討された。むろん、多摩移転に伴う教学改革には様々な立場や意見が存在しているが、このオーラルヒストリーから川上氏がリーダーとして説得や調整をしていたことがわかる。この摩擦の多い仕事を成しとげられたのは、氏の教学改革に対する企画力と、1960年代以降、長い時間をかけて温めてきた教学改革に対する思いであろう。なお、このインタビューに同席した、法政大学大学院事務部長の沖田吉史氏は、経済学部の卒業生（1990年卒業）で全学の教学改革を職員として支えた。つまり、このオーラルヒストリーでは、元教員（川上氏）、元学生・職員（沖田氏）という二つの対話から過去の想起が生まれている。このような点も本オーラルヒストリーの魅力なのである。

第三に、1993年に常務理事に就任した後に担当することになった全学の教学改革があげられる。川上氏は、阿利莫二総長の理事会の中でも教学改革を担当することになった。川上理事の私的諮問機関として7月に「21世紀の法政大学」プロジェクト検討会が立ち上がり、高い改革の意欲を持った人が学部・組織横断的に教職員の中から集められたのである。そして、1994年には「中間報告集」が刊行され、総長＝理事長の公式諮問機関として「21世紀の法政大学」審議会が設置される。さらに1995年に下森定総長が誕生した後も、この審議会の答申をもとに1996年1月に教学改革本部が設置された。本オーラルヒストリーは、この組織作りからはじまる一連の経緯について、当事者の目線から語られたものである。

ところで、横断的ネットワークをつくり、現状を調査し、議論し、未来計画を生み出すという活動は、先述した研究・教育体制懇話会と同じ方法である。つまり、その時々状況に合わせて川上氏は、教学改革という目標に挑み続けたと言えよう。川上氏は、理事時代の教学改革について次のように述べている。

「理事になる前の時に考えてきたこととそんなに違いはないですね。流れはわりに直線でつながっていたと思います。」

川上氏のオーラルヒストリーが、法政大学の教学改革史を知るために欠かすことができない歴史資料であるのはもちろんである。それだけでなく、一人の大学人が信念をもって教学改革に取り組んだキャリアの記録であり、だからこそ未来の教学改革に向かう大学人へのメッセージになっているのである。

最後に、長時間のインタビューにご協力いただいた川上忠雄先生にこの場を借りて感謝を申し上げます。

川上忠雄略歴

1933年 徳島県生まれ

1956年3月 東京大学経済学部卒業

1959年3月 東京大学大学院経済学研究科応用経済学専攻修士課程修了

1959年4月 法政大学経済学部研究助手

1962年3月 法政大学大学院社会科学研究科経済学専攻博士課程単位取得満期退学

1962年4月 法政大学講師

1965年4月 法政大学助教授

1971年4月 法政大学教授

1981年4月 法政大学経済学部長（1983年3月まで）

1993年5月 法政大学常務理事（1999年4月まで）

2004年3月 法政大学を定年退職

2004年4月 法政大学名誉教授

川上 忠雄元常務理事オーラル・ヒストリー



開催日 2021年9月8日(水)

場 所 法政大学多摩キャンパス 総合棟5階 役員室附属会議室

出席者 川上 忠雄(法政大学元常務理事)

梅崎 修(法政大学キャリアデザイン学部教授)

小林 ふみ子(法政大学文学部教授)

沖田 吉史(法政大学大学院事務部長)

北口 由望(法政大学HOSEIミュージアム学芸員)

目次

1. 東京大学在学と学生運動
2. 法政大学大学院進学と同時に助手に
3. 研究・教育体制懇話会を立ち上げる
4. 3冊の白書をまとめて
5. 講師から助教授へ
6. 多摩移転前に学部長就任
7. 経済学部の教学改革
8. 全面移転か部分移転か
9. 常務理事としての教学改革
10. 「21世紀の法政大学」プロジェクト検討会の発足

11. 「21世紀の法政大学」審議会に発展

12. 4学部同時に新設(教学改革本部)

13. 清成忠男総長の時代

14. これからの法政大学に向けて

1. 東京大学在学と学生運動

梅崎 それでは、インタビューを始めさせていただきます。オーラル・ヒストリーのやり方ですけれども、基本的には川上先生の法政大学でのお仕事の歴史、主に大学行政に関してお聞きしたいです。そういう意味では学問史ではないですけれども、経済学をご研究され

て法政大学内で経済学部の改革に取り組まれているわけですから、学問の話とまったく切れて話が進むということはないかと思います。最初のところで先生がなぜ経済学を学び始めたのかということと、法政大学と初めて出会ったというか、法政大学の博士課程から入られた、そのへんの出会いについて、お話しいただきたいなと思っております。いろんな学部がある中で、経済学を学ばれようと思われたきっかけみたいなことはあるのでしょうか。

川上 社会科学に関心があったんですけど、法学というのは嫌いだったんですね(笑)。そうすると、もう経済学になる。

梅崎 もともとは徳島県にお生まれになって、大学進学で、東京大学に入られた時点で東京に上京して来られたということによろしいですか。

川上 いや、徳島で生まれて、それからあとはほとんど徳島にはいなくて、名古屋で過ごし、そして大学へ入った時には名古屋だったのかな。それで、名古屋から、どうしたんだったかな。もうずいぶん昔の話なので。

梅崎 東京大学に来てから、3年生になった時にゼミに入ると。どなたのゼミに入るとか、専門を絞られていくということだったと思いますけれども。

川上 東大ですね。大学の3年生の時のゼミはおおうちつとむ大内力ゼミに入ったんですけど、大内さんがす

ぐに留学でいなくなってしまうと、加藤俊彦先生に代わったんですね。だから、卒業までずっと加藤ゼミだったんです。

梅崎 当時の覚えておられる範囲で、例えばマルクスの「資本論」を読んだとか、何か専門でこの本で勉強しましたというのは、ご記憶にありますか。

川上 そうですね、経済学で何を読んで感銘を受けたかな。もう、なにせ古い話だから忘れちゃっているんですけど。

小林 先生は革命運動家だったと、7年前におっしゃっていました¹。

川上 はい。

梅崎 学生運動にも非常に参加されているという。

川上 学生運動には非常に。リーダーでずっとやっていたから。

梅崎 この時代で考えてみると、60年安保のもうちょっと前ですね。

川上 前ですね。

梅崎 やっぱり学問としても、マルクス経済学が非常に強かった。

川上 それはもちろん、圧倒的にマルクスだったですね。

梅崎 当時、学生運動で闘士に入られたきっかけはあるんですか。誰かに誘われたとか、すごく影響を受けたとかいう、マルクス経済学なり学生運動に入られたきっかけというのは。

1 2014年7月2日開催の第8回法政学研究会にて川上先生が行なった講演「法政大学の教学改革1993-2001」(以下、「2014年のご講演」とする)によると、次の通り。

「私は大学教員になりましたけれども、ずっと革命運動家だったわけです。革命運動家たらんとしていて、ちゃんとなれなかったと言った方がいいかもしれませんけれども。だから、人をアジるというのを学生のときからやっていたわけです。それでずっと年取ってきたというような経緯で。だから、私にアジられて、ずいぶん人生が狂ったという人もたくさんいると思うんですけども。」

川上 きっかけというのは個人に影響を受けたのではなくて、その時の雰囲気みんなマルクスだったですからね。

沖田 先生ご自身も、何とかしなければという思いも。社会を何とかしようという。

川上 うん、社会変革の意欲には燃えていましたからね。そういう学生だったです。だから、自治会の委員長もずっとやりましたし²。

梅崎 当時、学生運動をやるということとマルクス経済学を勉強するということは車の両輪みたいなものだと思いますけれども、ただ、進路ということを考えると、研究者の道を選ぼう、研究もやってみようというのは、大学卒業前にムクムクと希望が湧いてきたというか、思ったことなんでしょうか。

川上 とにかく、就職しようという気がなかったんですよ（笑）。就職するというのは、もう本当に嫌いで。

小林 革命運動家ですからね。

川上 何かそういうことに携わりたいという気持ちが強かったですね。

2. 法政大学大学院進学と同時に助手に

梅崎 大学院進学を大前提としてやられて、法政の大学院は博士から入られているんですか。

このへんが、ちょっと事前に調べた時にわからなくて、修士までは東大の大学院で、法政のどなたか指導を受けたい先生がおられて法政に移られたとか。

川上 いや、そうではなくて、修士課程を東大で終わったあとに、法政がその当時、珍しく助手を採ったんですよ。助手制度を持っていたのはその頃は本当に少なく、私はとにかく飯も食えなかったから、どこかでお金をもらえるとするのは非常に大事だったんですね。それで、法政の助手の試験を受けて、それをうまく通って。

小林 助手の仕事と博士課程の学生と、並行してやるんですか。

川上 兼ねていたんですね。助手のほうで給料をもらって。

小林 いい制度ですね。

川上 いい制度だったです。そういう助手制度を持っていた大学は、そんなにまだ多くはなかったと思うんですけど³。

梅崎 そうしますと、法政大学の研究助手になられたのが、川上先生が法政大学とつながりを持ついちばん初めということになりますか。

川上 そうですね。

梅崎 でも、学問的には、法政大学の中の研究

2 「粕谷信次教授退職記念座談会：生い立ち、修業時代、学問研究」（『経済志林』第78巻第4号、2011年3月、465頁）における川上先生の発言によると、次の通り。

「ブントの島〔成郎〕というのと僕は一緒に自治会運動をやっていたわけで、その後別れましたが、彼の『ブント私史』を実はこの2、3日前から、非常に懐かしく読んだんです。」

3 法政大学戦後五〇年史編纂委員会編『法政大学と戦後五〇年』（法政大学、2004年、以下『戦後50年』とする）に収録された部局史「経済学部」（480頁）によると、経済学部では1951年に「公募制と任期三年後の原則的昇任を骨子とする助手制度が発足した。（中略）新規採用者を原則として助手として採用するという事は、本学部の人的構成を若返らせる上で大きな役割を果たし、公募制による厳密な論文審査による教員採用は、教員相互の上下関係に縛られない自由で活発な教授会の雰囲気を作り出した。」

グループと、その前にも付き合いはあったんですか。それとも初めてですか。

川上 いやあ、法政大学の人とは特に付き合いはなかったですね。

梅崎 今は助手制度がないんですけども、川上先生が法政に移られた時の研究助手のお仕事というのは、研究以外に授業とかは持たれないわけですか。

川上 授業は持っていません。ただ、資料室の資料の整理を手伝うとか、そういう仕事はありましたけどね。

梅崎 そういう意味では、研究に集中していいよという。

川上 そうでした。

梅崎 今では助手制度が残っているところも、授業を4つ持ちなさいと言われますね。研究だけやっていいよという恵まれたポストはなかなかないと思います。そうしますと、助手になった後、経済学部の先生方と親しく交流したり議

論したりすることが、法政内で生まれたということですか。

川上 はい。

梅崎 何かご記憶に残っておられる先生はおられますか。川上先生が助手で入られた時の教授とか、助教授の方で。

川上 助手で入った時の教授というのは、助手というのは教授を持つわけだったんですけども、その教授というのは渡辺佐平さんという法政大学の総長をやった人ですね。だけど学問的には、意見がすでにもう違っていたので(笑)⁴。

北口 先生が入られた頃、渡辺佐平先生は学部長でしたか。

川上 学部長もやっていたと思いますけども。

小林 以前伺ったお話で、法政に来た時の自由な雰囲気印象に残っているとおっしゃってたんですけど、自由な雰囲気というのはどんな感じでしたか⁵。

川上 いやあ、本当に自由だったです。教授の

4 法政大学大学史資料委員会編『法政大学史資料集 第31集 法政大学歴代教員名簿3』（法政大学、2010年、16-17頁）によると、川上先生が研究助手に就任した1959年度の経済学部（専任教員）は次の通り。なお、同年4月に大内兵衛総長が辞任し、有沢広巳が新総長に就任した。

教授：渡辺佐平（学部長）、友岡久雄（常任理事）、山村喬、中野正、宇佐美誠次郎、小川一、大島清、奥沢篤次郎、森吉之助、岡崎次郎、上杉捨彦、鈴木徹三

助教授：高橋誠、日高晋、山本弘文、時永淑、古川哲

講師：尾形憲、徳永重良、良知力

助手：野田正穂、渡辺寛、森川英正、川上忠雄

5 「2014年のご講演」によると、次の通り。

「私の率直な感じでは、戦後とても自由な大学だった。普通に自由と進歩の学風ということがありますがけれども、確かに伝統的権威がない。学閥がない。校友閥もないと。こういう大学はなかなか珍しいのではないかな。新しい大学はもちろん何もなければいけないけれども、古い歴史を持っている大学なのに、こうだというのはなかなかない。

伝統的権威がないということと言いますと、私が入ったあたりでは、振り返って見ると建学の精神がはつきりしない。それはそれで、創立した人が気の利いたことを残していないわけですね。

学閥がないということと言いますと、私が入ったころには東大閥というのが、東大から来た者がずいぶん多かったですね。私もその1人ですけども。しかし、その後、非常に自由に人を集めるということで、全

前で勝手なことは言えないとか、そういうのがまるでない、好き勝手にいろいろしゃべっていましたね。

小林 どの先生がという、印象はありますか。

川上 いやあ、その頃の先生というのは、確かに記憶は結構ありますよ。いちばん記憶に残っているというのは、私が助手の時の渡辺佐平先生、そのあと総長になった人ですけども、彼に金融のことを学んだ。それで、だいたい金融のほうに行ったんだと思いますね。

梅崎 法政大学に移られた、助手になられた時は1959年ということで、学生運動も60年安保がピークというか⁶。

川上 そうですね。

梅崎 だから、研究助手という大学側の人間なのだけれども、同時に学生運動としてはピークだった。その当時、川上先生ご自身は20代中頃をちょっと過ぎて、学生運動とはちょっと距離を置いて研究のほうでやっていこうとか、ど

ういう変化の時期だったのでしょうか。

川上 さあ、どれぐらい学生の中から変わっていたかというのは、今から振り返って正確には言えないんですけど、確かに変わっていましたよね。

梅崎 学生運動がその後も激しくなってくるという部分がありますよね。60年安保とかだと対政府というか、街頭デモに関してももっと暴力的になってくる部分もあると思います。先生のお気持ちとしては、法政内でもそうですけれども、学生たちの動きとか熱というのをみて、ちょっと上の先輩みたいな感じになるわけじゃないですか。20代後半の人間として見た時に、応援してあげたいなという思いだったのか、ちょっと激し過ぎて自分の時代と違うなみたいなお気持ちだったのか、どっちですか。

川上 自分のときと違うなというふうには、あまり感じたことはなかったですね⁷。

梅崎 研究をしながら、その当時の学生さんと

国の大学から優秀な人を引っ張ってくるということになっていると思います。

校友圏がないというのも、私が入ったころには相当有力な校友がいたんですね。福島(敏行)さんだったかな。しかし、その人が力を失ってからは、そんなに有力な校友というのは現れなかった。従って、自由闊達に振る舞えば、何でもできるという雰囲気が大学にあったんです。しかし、これは反面、いいことばかりではなくて、無責任なところというのがあったんです。法政大学というのは、わりに無責任な大学だったという感じを、入ってきてしばらくたってから、いろいろなところでそういうふうに感じました。」

6 『戦後50年』(194-198頁)によると、法政大学では1960年6月、安保反対法政大学全学抗議集会を開催し、教職員・学生2,500名が国会へ抗議デモに向かい、機動隊員の襲撃を受けた教職員38名が負傷した。

7 前掲「粕谷信次教授退職記念座談会」(463頁)によると、次の通り。

「いや、一般大衆だけではなくて、そのとき、東大の大学院なんかの連中もだいたいそういう感覚だったので。ちょうどそのとき、今も覚えているけれども、これはとにかく本格的に社会科学的な分析をやらなければいけないというので、大学院で呼びかけて、そういう研究会を組織したんです。

私は法政の助手になったばかりのときですが、だから法政から東大へ行って、それをやろうとしていたのだけれども、行ったら、皆いないんです(笑)。要するにもう樺〔美智子〕さんの話になってしまって、そんなのは皆吹っ飛んじゃって出かけてしまっているわけです。

ちゃんと科学的に分析をしてというような雰囲気とはちょっと違う。異様な雰囲気だったけれども、大学人が大学を放り出して街頭へ出ていたという、そういう感じの時期だったですね。」

も、授業は持たなくてもお付き合いとかはあったんですか。

川上 学生とですか？ いやあ、助手の時にはなかったですね。

梅崎 そういう意味では本当に恵まれた、あまり今の大学では聞かないポストです。

助手期間を終わられて、そのまま経済学部の講師になられると。年表を見ますと、1962年に先生は初めて講師というポストになられて、たぶんここから授業をされたりとかゼミを持たれたりということがあったと思います。先ほど学生とは接点がなかったとおっしゃられていたんですけれども、そこで初めて。

川上 そうですね。

3. 研究・教育体制懇話会を立ち上げる

梅崎 講師になって授業を始めて、どんな感想をお持ちになりましたか。ちょっと当時の授業というのもわからないところがあるんですけども。

川上 そうですね、もうだいぶ昔の話だからあれですけど、どうだったのかな。

小林 初めの頃の学生さんには、どんな学生さんがいらしたとか。

川上 法政の学生と接し始めた時には、東大のそれまでの自分の同僚で、前にいたのと比較してどう違うかというのは感じましたね。法政の

学生というのは気がいいというか、実に付き合いやすかったですね。

梅崎 そのへんは今と変わらないですよ。下手に知識の競争をするわけではないし、でも日常生活とか研究仲間との会話、ゼミの会話を愉しもうという気持ちがあるのかなと思いますけどね。

当時の授業は今と違うところもあると思います。後の話ともつながってくるとは思いますけれども、教室に学生がギュウギュウ詰めだったと。教学改革に先生が携わられる前は、市ヶ谷のキャンパスにたくさんの学生がいて、教室が足りないとかゼミ室がとれないとか、どこにも場所がないわけですから。そうしますと、ひとつの授業で、例えば経済学の金融を教えますよという時に、何人ぐらいの学生が講義を受けているようなイメージですか。

川上 教室にみんな学生が出て来たら入れないというところで授業をやっていたんです。だから、本当に、全員は出て来ないから成り立った(笑)。

小林 実際は、どのくらい出て来るんですか。

川上 出て来るのは、それ相応に出て来ましたよね。

小林 何百人ぐらい？

川上 何百というところとちょっと多すぎるかな⁸。

沖田 ちょうどいい塩梅に出て来ていたんです

8 『戦後50年』別冊(167頁)によると、経済学部(一部・二部)の学生数と専任教員数(助手を除く)、学生/教員は次の通り。専任教員一人当たりが受け持つ学生数はピークの1961年時点で578.3名にのぼり、次に多い法学部の2倍以上となっていた。

1959年：7,548名、20名、377.4名/1960年：7,890名、20名、394.5名

1961年：12,145名、21名、578.3名/1962年：12,552名、22名、570.5名

1963年：9,081名、22名、412.8名/1964年：8,511名、22名、386.9名

1965年：8,502名、24名、354.3名

かね (笑)。

川上 そうですね。

小林 出て来ない学生が何百人もいると、成績をつけるのも大変ですね。

川上 まあ、そうですね。

小林 先生が、教え始められてすぐ研究・教育体制懇話会を作られているというのは、すごく早くてびっくりしちゃうんですけども。

川上 それは私が作ったんですよ。

小林 どういう思いで？ 学生を教えられて「もっとこうしたい」とか思われて？

川上 学生をとるか、要するに大学のそういう教育を充実させようということで仲間と一緒に何人かで作ったんですけど、もう助手から上がったらずぐに作ったんじゃないですかね。

沖田 教育が充実していなかったんですね。

川上 まあ、充実していなかったということも言えますけれども、それ以上に何かやらなくちゃという意欲のほうが強かったですね⁹。

梅崎 事前に資料を見せていただくと、先ほどのひとつの授業で全員来てしまったら授業が成り立たないような教室の狭さとか、あとゼミナールとかも全員が入れないような状態なんですかね。希望者がたぶん落とされてしまって、ゼミに入っていない学生というのがすごく多いという。

川上 ゼミに入るのにだいたい試験をして入れ

ていましたから。入れない学生が大多数ですよ

ね。
梅崎 他のことをやっていて希望してないならばそうなんでしょうけど、大学に入ってこのゼミに所属したいなと思っているのに、あまりにも倍率が高いとか、ゼミの部屋もなかなか取るのが大変だということだったら、ちゃんとした教育ができないという。

川上 そうですね。ゼミの部屋なんていうのも、経済学部も多摩に移って初めてできたんですから。市ヶ谷ではなかったですよ。

小林 そういうのもあって、もっと広いところへというのがその時代からあったんですね。

川上 法政のキャンパスは非常に狭いというのは、私が大学に入った時から固定観念みたいにあって、何とかしなければという気持ちはあったんです。

小林 62年館ができる前ですね。

北口 55年館ができて58年館ができて、市ヶ谷は大きな建物ができた頃だとは思いますが、

梅崎 とはいえビルだけで、あと全員がそこにギュウギュウ詰めになっていたと。それを、何か変えたいなという思いをフツフツと持っておられて。川上先生と仲間ですよ、これを見ますと。結局、徳永(重良)先生や川上先生は経済学部で、野田(正穂)先生がそこに入って来

9 法政大学研究・教育体制懇話会は1965年に白書第1集として『法政大学研究条件白書—研究条件の現状と問題点—』を刊行した。同書の序論(徳永重良、2頁)によると、次の通り。

「昨年(1964)の秋、教授懇談会の主催によって『法政大学の未来について』というテーマで懇談会が開かれた。法政の現状と未来には幾多の困難な問題が横たわっていることが痛感された。そこで、こうした問題について今後きたんのない意見を交わし、持続的にそれと取組む会を作ろうではないか、という気運が高まった。かくして研究、教育体制懇話会が生まれたのである。われわれは、その後12回にわたる研究会(マツ)を聞き、研究室、資料室、および図書館などの問題について検討を加えてきた。」

るという形で、これは出会いの順番というのはあるのでしょうか。なぜ3名が仲間になっていったのかというのが。同じキャンパス内にはもちろんいるわけですが。

川上 あと、今そこに名前が出て来なかったの、法学部の下森(定)さん。彼は非常に熱心かったです。私と下森さんがだいたい中心だったんです¹⁰。

沖田 のちに、川上先生が理事の時、下森先生が総長だったですよ。

川上 そうです。

北口 長いお付き合いでいらしたんですね。

梅崎 こういう他学部の先生とグループを作ったり、同じ思いを持ってると感じたりというのは、どんなきっかけで起こるものなのでしょうか。

川上 はじめ、私が法政に入った頃は、学部でまとまっているなんていうことはなかったですから。教職員食堂があったはずですが、今はどうなっていますかね。

北口 2階に教職員食堂が入っていた58年館は、建物ごとなくなりました。

川上 ああ、なくなっちゃった。あの教職員食堂に、教員というのはみな集まっていたんですよ。その前に、教授室がありましたね。教授室とその教職員食堂、そこらへんに教員はたむろしていたわけです。

沖田 一緒に会って、いろんなお話をされたりしていたんですか。

川上 そうです。ワアワア、侃々諤々、やっていたね。

小林 その頃の若手といえばこの人たちという、若手全員みたいなグループだったんですか。それとも、若手の中でごく一部ですか。

川上 いやあ、やっぱり中心になるのは何人かいてというあれですね。下森さんも然りだし。

北口 徳永先生は、川上先生よりも少し上の世代になりますか。

川上 2つ上です。だけど、途中で東北大学に引っ張られて行っちゃったんです¹¹。

北口 経済学部からは徳永先生と川上先生が参加されていたんですか。

沖田 いや、作ったんですよ。

川上 みんな自由に作っているの、誰が委員だとか何とかということではなくて。

沖田 そこに、他の先生たちも集って侃々諤々やっていた。

川上 そうですね。

小林 その頃、文学部はいなかったんですか。

川上 文学部もいましたよ。いましたけれども、文学部でいま思い出すのは誰かな。

北口 渡辺一夫先生ですか。

川上 いましたね。彼も入っていました。だけど、文学部ではもうちょっと活発な人がいたん

10 前掲『法政大学研究条件白書—研究条件の現状と問題点—』の執筆メンバーは、次の通り。

法学部：下森定、霜島甲一／文学部：安岡昭男、渡辺一夫、杉本圭三郎、国府種武

経済学部：川上忠雄、徳永重良、尾形憲／社会学部：船山栄一／経営学部：野田正穂

第一教養部：金丸十三男、千葉康則、鈴木建三／第二教養部：内海利朗、筑波常治、西川清治

11 『戦後50年』(485-486頁)によると、大学紛争を契機に、各大学がスタッフの充実に力を入れ始めた。1968年から1974年までに本学経済学部から流出した教員の数は10名に及び、徳永重良が1971年に東北大学へ移るなど、大きな損失であった。

じゃなかったかな。

小林 小田切秀雄先生とか？

川上 それはもう本当に世代が上の人で。上だけれども、そういう集まりに小田切さんも顔を出していました¹²。

梅崎 研究・教育体制懇話会というのは、最初は自主的な集まりで。

川上 初めから自主的で、終いまで自主的でした(笑)。

4. 3冊の白書をまとめて

梅崎 途中で法政大学の白書を出されたり、調査結果を出されているんですけども、細かいことですけども、そうなってくると印刷など必要になってくるので、何か大学補助みたいなものがあったのかなと思ったんですけども。

川上 いやあ、大学から補助をもらったという記憶はないですね。自分たちでやったんで。

梅崎 今は、こういうふうな形で綴じてありません。

北口 これがいちばん最初に、1965年にまとめてらっしゃる白書ですね。

小林 大学の図書館に入っているということは、先生方が図書館に納められたんですか。

川上 そうですよ。

梅崎 でも、こういうふうにしちつとした印刷物になっているので。自主的な組織だけれども、みんなお金を出し合って1冊出すかみたいなことなんですかね¹³。

沖田 ちょうどその頃、多摩キャンパスの土地を買われているんですけど。

川上 えーと、この土地を買ったのはいつでしたかね。

沖田 昭和でいうと39年に買い始めているみたいなんですけど、そうとう前にここは決まっていたんですよ。

川上 はい。買ったのはわりに早かったんだと思いますね。だけど、開発して使えるようになるのはもうちょっと後ですね。

北口 20年かかっています。

沖田 すぐには使えないですよ。やっぱり山ですもんね。

川上 山だし、そのところに谷があるでしょう。あの谷を渡るような橋を懸けないことには行き来できなかったです。

12 白書第2集にあたる1966年『法政大学教育白書 上』の執筆メンバーは次の通り。

法学部：下森定、霜島甲一／文学部：国府種武

経済学部：川上忠雄、徳永重良、是永純弘／社会学部：石川博志／経営学部：角瀬保雄、一寸木俊昭

第一教養部：千葉康則、百瀬文雄／第二教養部：内海利朗

1967年『法政大学の研究と教育（白書第3集）—現状分析とわれわれの提言—』（以下、『白書第3集』とする）の執筆メンバーは次の通り。

法学部：下森定／文学部：杉本圭三郎、白井慎

経済学部：川上忠雄、徳永重良、尾形憲／工学部：岩村国也／社会学部：北川隆吉

第一教養部：百瀬文雄／第二教養部：内海利朗

13 前掲『白書第3集』の「あとがき」（川上忠雄、358頁）によると、次の通り。

「この白書第3集の作成にあたって、資料蒐集、整理に多くの職員の人々の援助を受けた。また出版についても同様後援会と大学当局から資金援助を受けることができた。」

沖田 なんでここだったんですかね。

川上 いや、それは買った人に（笑）。社会学部の、事故で亡くなった栢野（晴夫）さんだったかな。大学を代表して彼が買ったんです。

北口 谷川徹三総長の頃ですね。

川上 そうですかね。総長のことは覚えていないけど、栢野さんのことはよく覚えていますね¹⁴。

沖田 そうすると、場所として、この土地を買っちゃったら、先生方の気持ちとしてもいつか広いところ、いつかこっちに来てという思いはその頃からあるんですか。

川上 なかなか皆、そう簡単にはならなくて（笑）。

小林 遠いからですか。

川上 僕らみたいなのはそういう気持ちで、いいところがあったというふうに思いましたけどね。なんか、市ヶ谷の魅力というのから離れられなかった人もいるんじゃないですか。あんな狭いところで。

梅崎 その時の教員の住まいがどこにあるかというのも関連してくると思いますけどね。先ほどの話に戻りますが、この白書を、第1号というのを出して、その後も1年後にまた「法

政大学教育条件白書（上）」を出して、その後も第3集まで出されて、毎年1冊ずつ出しておられます。自主組織でありながら白書を出し続けるって本当に大変な作業だったと思うんですよね。誰が言い出しっぺというか、みんなで話し合っている中で「白書をつくろうよ」という話に？

川上 それは、私はその一人だったですけど、あと法学部の下森さん、それから経済学部の徳永さん。

梅崎 学生に読んでもらいたい、それからその他職員や、いま懇話会には参加していない教員の方に読んでもらって、「現状こうなんだよ」という問題の共有みたいなものをしたいという思いでしょうか。

川上 いや、そんなにいろいろちゃんと考えて結論を出したわけではないけれども、とにかく今のままではたまらないと。そういう問題意識が強かったですね。

小林 誰に読んでもらいたいとか、そういうことではなかったんですか。

川上 自分たちで自分たちの酷い状況をとにかくアピールするという、そういうことだったです¹⁵。

14 大学が町田校地を初めて取得したのは、谷川徹三総長・栢野晴夫理事時代の1964年12月のこと。続く渡辺佐平総長時代の1967年6月に総計61万5000㎡を取得してほぼ完了し、その後の取得分を含めると、約68万9000㎡に及ぶ（『戦後50年』244頁）。

なお、1982年に急逝した栢野について、当時総長の中村哲は「多摩新校地が当時、財務・施設担当の常務理事をされていた氏の努力によって入手することが可能」となり、「月世界に土地をもとめるのと同じ」ような空論だという学内外の批判があるなかで、栢野の「先見の明は美事に適中」し、法政大学の歴史的学制改革の「第一の恩人」とであると讃えている（栢野晴夫先生の諸業績を記録する会編『栢野晴夫先生の追憶』高文堂出版社、1983年、16-17頁）。

15 前掲『白書第3集』の「Ⅲ われわれの提言」（277-298頁）にて発表された提言の諸項目は次の通りで、これまでの討議をふまえて、A. 教育体制を川上が、B. 研究体制を下森が、C. 管理・運営体制とまとめの部分を北川が担当して原案を作った。

小林 やっぱり学生が多すぎる、狭すぎるというのが特に。

川上 それはもう、あの市ヶ谷にいたら、それはすぐに感じますよね。

沖田 先生方の部屋とかも、研究室も。

川上 そんなものはないですよ。

小林 数人に一部屋とかもなかったんですかね。

川上 いや、数人に一部屋ぐらいはあったでしょう¹⁶。

沖田 でも、それがなかったから、教職員食堂で侃々諤々があったという。

梅崎 そこだけは狭くていいところなんですね。今みたいに部屋に閉じこもっているわけではなく、教員間が仲良くなるという。だけど、研究環境としてはね。この序論なんかを読むと、最初のところに徳永先生が書かれているんですけど、「法政大学はまるで砂漠のようだ」という。「学生たちが言ってるけど、変えなければいけない」という、白書なんですけど、みんなにこの状況を訴えたいという思いが伝わってくる文章ですよ。

北口 ベテランの先生たちも参加したんですか。

川上 集まっていたのは若手の連中でしたね。

沖田 たまに小田切先生（笑）。

川上 そうですね。小田切さんなんかが出て来たら、それはもういちばん偉い人だったです。

梅崎 やっぱり年上の先生方は、逆に運営に携わっている理事をされたりしている。世代間の意見の違いみたいなのが反映された報告書なんですかね。

川上 その当時、教員が集まるというと、教職員食堂に「教授懇談会」という名目で、関心のある人は学部を超えて集まったんですよ。その時の「教授懇談会」の面々に、そういう若手でいろいろ意見を言うのが顔を出していたんだと思います。

沖田 同じ頃のさっきの栢野先生が議長で、法政大学総合計画審議会（総計審）という、「21世紀の法政大学」審議会の時に何度かお話しいただきましたけれども、これが大学の将来計画の第一歩みたいなものなんですか。

川上 総計審というのは、1回じゃなくて2回

A. 教育体制の改善について

1. われわれの教育理念／2. 教育課程の改革および教育内容の充実／3. マス・プロ教育の弊害是正／4. 入学および進級制度の改善／5. 教育施設拡充／6. 町田移転基本方針の確立

B. 研究体制の改善について

1. 研究者の待遇／2. 研究施設の整備／3. 研究組織の改善／4. 研究者の養成

C. 管理運営体制の改善について

1. 明確な教学方針を持つ教授会中心の管理運営の確立／2. 教職員組合の民主的な研究教育計画推進の活動的主体としての発展／3. 総長公選制の実現／4. 理事会、評議員会構成と選出方法の民主化／5. 事務機構および予算制度の改善

D. まとめ

1. 大幅公費助成運動の必要性／2. 諸提言実現の順序／3. 当面する学費値上げ問題について

16 『戦後50年』(241-244頁)によると、1969年12月、一口坂に69年館が竣工、1981年4月には地下4階、地上9階の図書館・研究棟からなる80年館が開館し、これにより教員研究室は、ほぼ2人1室となった。

あったんじゃないかな。2回目のがかなり¹⁷。

沖田 じゃあ、違う先生の時ですか。

川上 いや、同じ人たちだと思いますけど。

小林 先ほどおっしゃっていた教授懇談会の場で、この当時、女性の先生、例えば駒尺喜美先生とかはこういうところにいらしたりしましたか。

川上 いましたね。いましたけども、何か発言をしてリードするというようなことをやった記憶はあまりないです。

小林 女性の教員自体がものすごく少なかった時代ですかね。

川上 はい。

北口 この頃、若手の経済学部の先生だと、尾形憲先生もいらしたと思うのですが、こういうのに参加していたんですか。

川上 彼はね、これに参加していたかな。どこかで参加していたと思いますけれども、中心的な役割からは外れていたんですかね。

5. 講師から助教授へ

梅崎 このような白書を出されている中で、先生は講師から助教授に昇進されます。1965年に助教授になられて。

川上 遅いですね。

梅崎 32歳の時ですけども。これは内容的には、助教授になったから授業が増えたとかコ

マ数が増えたとか、変化はないですか。今も別にないんですけど、当時はけっこう「講師の人はこれで」「助教授の人はこれで」みたいな仕事の変化のある大学もあるかと思うんですけども、例えば大学院を担当するようになるとか。

川上 我々の時には、どうだったかな。もう記憶がはっきりいたしませんけれども。

梅崎 法政はわりと自由があるので、助教授だから何とか講師だから何とかというような違いがないのかもしれませんが。理系は違うのかもしれないですけど、私もいまの学部¹⁸に所属して約20年近くなりますけど、自由ですよ。

川上 自由だったです。

梅崎 普通に、一国一城で、あなたは自分の研究をなさいたい感じだと思うんですけども。

北口 渡辺先生の「金融論」を引き継いで、そのまま川上先生も「金融論」を教えていらっしゃるんですが、渡辺先生に影響を受ける形になったんですか。

川上 そうですね。彼から影響も受けましたし、金融のそういうことをやりたいというのは、自分に前からありましたから。

梅崎 先生が講師時代に担当していた科目名自体が「金融論」なんですか。どういう科目に。

川上 最初に持ったのは何だったかな。

北口 記録によると、助教授の時に「金融論」

17 『戦後50年』(245頁)によると、1967年6月に発足した「総合計画審議会」(議長・栢野晴夫)で、町田校地を活用しての教育・研究条件の改善が本格的に議論され、1969年7月に出された答申では、町田校地に「『将来、昼間部及び大学院、その他すべての大学の諸施設を集中する』」のが『もっとも望ましい』とされた。そして、『人文学部』というような新学部を創設し、さらに理学部を新設、ないしは工学部の理工学部への発展を図り、両学部¹⁹に人文科学系、自然科学系の教員を吸収することによって、教養部を解消するという案が出された。その後、1970年6月に設置された「全学カリキュラム委員会」(議長・森川英正)での議論を経て、1972年4月に発足した「総合計画作成委員会」(議長・舟橋尚道)に引き継がれた。

を担当されています。

川上 最初はそうだったんでしょう。

北口 おそらく、渡辺佐平先生の担当をそのまま引き継いでいらっしやったんですかね。

川上 そうでしょう。

梅崎 講師の時とか、助教授の時とか。

北口 本日用意した資料には、講師の時の担当教科が書いてないんです。助教授からは書いてあります。

川上 講師の時は、ただ「外国経済学」か何かだけをやるという、それを5つぐらいやらされました。

小林 けっこう多いですね。

北口 外書というんですかね。

小林 あ、外書講読。

梅崎 ゼミとかは、もちろん講師の時からゼミを持たれるんですか。

川上 いやもう、細かいことは忘れちゃいましたけど。最初からゼミを持ったんじゃないですかね。

梅崎 ゼミではどんなスタイルで運営されていたのでしょうか。今ですとわりと古典を読むゼミが逆に少なくなって、外に行こうとか実習に行こうというのが多くなるんですけど、当時のゼミの運営スタイルというのは、経済学部では輪読ですか。

川上 そうですね、それが多かったです。

梅崎 先生が、「今年はこれを読もう」とか決められて、順番に学生が要約して発表して、ディスカッションするというような。

川上 はい。そうでしたね。

梅崎 当時はゼミ内でも、ゼミ生同士が激しく議論するという感じですか。どんな感じなのかなと。

川上 激しく議論するというほどでもなかったと思うけど。

梅崎 読んで来たものをまとめて。特に、これは必ずゼミで読むテキストだったなとか。

川上 レーニンの「帝国主義論」ですね。これは、現代を規定していて、わりにみんな読んだものです。

梅崎 ゼミでやるのに、適度の量というのもあるのでしょね。「資本論」とかやり始めてしまうと……。

川上 「資本論」は無理ですよ（笑）。

梅崎 間に合わなくなってしまうとか、終わらなくなってしまうとか、そもそも完成していないですからあれですけども。そういう意味では、レーニンの「帝国主義論」とかをみんなで読んで、外国の問題とか、周辺地域と中心地域の違いとか、そういうことをみんなで議論するということですね。合宿には行かれていたんですか。

川上 行っていましたね。

梅崎 もう今はなくなっちゃったけれども、三浦のセミナーハウスとか。

川上 なくなっちゃった？

梅崎 あと、白馬にありますよね。

北口 白馬もなくなっちゃいました。

小林 富士もなくなっちゃって、売られちゃいましたね。

川上 へえー。

小林 なんなら、箱根荘だって、もう。

北口 この間、手放しましたね。

川上 箱根荘は、教員の。

沖田 教学改革本部の皆さんと一緒に行きましたよね。

梅崎 そういうセミナーハウスを使われること

が多かったですか、みんなで合宿しようという時は。

川上 そうでもなかった。ゼミで合宿するという時は、近所のそういうゼミに貸してくれるような家を持っているところから借りて、それでやっていましたね。

小林 近所の？

川上 近所というか。

小林 旅館が市ヶ谷にありましたね。

川上 そんな近いところじゃなくて（笑）、富士山の麓とか。

6. 多摩移転前に学部長就任

梅崎 年表でいろいろ調べさせていただきますと、60年代の中頃までの若手時代のご活躍がいろいろありまして、その後、先生が行政にタッチされるのは、まさに多摩移転直前の1981年、川上先生が学部長をなさっています。移転の前で大変だと思うんですけども、まず執行部経験、もしくは学部長経験について伺わせていただきたいと思います。

小林 教授会主任とか。

梅崎 主任になって学部長があったと思うんです。

川上 教授会主任もやりましたけれども、それは1年やっただけで、すぐ学部長になったんじゃないですかね。

北口 その前に、大学院の専攻主任をされていますか。

川上 そうです。

梅崎 連続されていますね。主任をやられた後にそのまま学部長に、間を空けずに。学部の中

で徐々に中心的役割をなされるようになった、ちょうど40代後半ぐらい。

川上 もう、歳は忘れましたが。

小林 確かに、48歳で学部長になられていますね。

梅崎 早いですよね。

川上 遅いでしょう。48歳で学部長ですからね。

小林 いや、今だとすごい早いですよ。びっくりしちゃいますね。

川上 いや、聞いたら、ずいぶん遅いなと思いましたけどね。

梅崎 昔は、全体的に平均年齢も若かったのかれしれないですね。

小林 とはいえ、学部数はまだ6学部しかないわけですからね。

梅崎 そうですね。1つの学部における教員の数もすごい多いわけですね。先生の学部長としてのいちばんの使命は、直後に控えている多摩移転をできるだけスムーズに動かしていくかということになるんですか。先生ご自身が多摩移転の意思決定に関わられていますね。

川上 はい。

梅崎 ただこれ、経済学部長になってから関わられたのか。

川上 そうじゃないです。

梅崎 その前から？

川上 その前からです。

梅崎 それは、どういうお立場で。

川上 とにかく、市ヶ谷でまともに教育なんかできないということで、早いところ新しいキャンパスを開発して、そこでちゃんとした教育を

という気持ちだったです¹⁸。

小林 「文化科学部」構想にも、先生は関わっていらっしゃるんですか¹⁹。

川上 いや、「文化科学部」構想というのは、私はまったく関係ないです。

小林 じゃあ、別のところで進行するんですね。

7. 経済学部の教学改革

梅崎 先生のお書きになったものをいくつか読ませていただいて、初めて多摩移転の背景がわかりました。多摩に移転するということはいくつかの背景があるわけですが、先生のお気持ちとしては先ほどずっとお話の中にあっという間に、教学改革をしなければいけないという思いですね。多摩キャンパスに移転して、ちゃんと

した教育なり研究なりをつくっていかねければと。これは、ずっと筋が通っておられる。先生が考えられていた教学改革について、校舎が狭いので、ちゃんとした教育ができないということはいまお話しいただきましたけれども、他に何か背景はありますか。例えば研究面で研究所をつくろうとか、教学改革の柱というのはいくつぐらいあったのでしょうか。

川上 さあ、確かに研究所を作るというのはひとつの柱だったですね²⁰。

梅崎 研究所とか研究室という集まる部屋がなければ、みんな大学に来ない。要するに、共同研究ですよ。研究所がないと回りにくいというんですかね。

小林 比較経済研究所ですか。

18 前掲『白書第3集』の「Ⅲ われわれの提言」(286-287頁)によると、次の通り提言がなされていた。

「6. 町田移転基本方針の確立

(イ) 町田への部分移転

(ロ) 研究・教育についての十分な考慮のうえでの移転形態の確定

教育計画にもとづき適正規模学生数を基準として算定した規模の教育施設を現在の市ガ谷のキャンパスに建設することはまったく不可能である。図書館および研究室についてさえすでにそうした結論が出ているし、教室については土地が不足し、仮に土地の余裕があったとしても首都圏整備の関係で認可を受けられない。一般学生の利用しうる運動場については言わずもがなである。

したがって現キャンパスの拡張または町田への移転が不可避である。ところが、都心の高地価、教室建築不認可のゆえに現キャンパスに隣接しての拡張はあまり望めないし、教育環境などの点で長期的にみても賢明なやり方ではない。また町田への全面移転は教育環境からすればのぞましいが、現有施設の遊休化、あらたな巨額の資金投下の必要から教育研究をあまりに圧迫することになって適当ではない。したがって町田への部分移転こそが現状では最良の解決策である。(下略)」

19 『戦後50年』(255-263頁)によると、かねてより、2学科からなる「総合文化学部」として準備されていた新設学部構想は、1982年5月、「国際文化学科」と「人間科学科」のうち、後者を残す形で「文化科学部文化科学科」とすることが明らかにされ、同年7月、入学定員250名、専任教員35名で文部省に申請した。しかしながら、私立大学審議会が出した条件である「理事会に不一致がないこと」を解決することができず、1983年3月、申請を取り下げるに至った。

20 『法政大学経済学部多摩移転二〇年史』編集委員会編『法政大学経済学部多摩移転二〇年史』(法政大学経済学部、2008年、35-39頁)によると、1982年1月、川上学部長時代に経済学部教授会が発表した「教学改革・町田移転」素案では、教学改革の三本柱を1. 教育改革 2. 分権化 3. 研究体制の確立とし、第3項の筆頭に「世界経済研究所あるいは現代経済研究所の設立」を掲げた。

川上 それを作ったのはもうちょっと前ですね。それは、佐々木（隆雄）君が音頭をとって作ったんですけども。

梅崎 確かに、今は比較経済研究所で成立しているけれども、最初は世界経済研究所とか、名前は微妙に提案の中身と変わっているんですよ。

川上 戦前の世界経済研究所だったんです。それを作ろうとしたんですけど、私が研究所担当でなかったの、彼が比較経済研究所にして作ったんです。

小林 じゃあ、理事になられた後ですかね。

川上 はい。

北口 戦前の世界経済研究所の存在はご存じだったんですか。

川上 もちろん。みんな知っていました。

梅崎 『法政大学と戦後五〇年』の経済学部の教学改革という、先生のお仕事書かれている原稿では、相互批判とか共同研究の場を設置するというので研究所の話、あとサバティカル研究休暇制度を充実させるということ、あと図書ですね。ここにも立派な図書館がありますけれども、どういう図書館をつくっていくかということが書かれてあります。大原社会問題研究所との有機的連帯ということですから、こちら側に大原を持って来るといことも含めて研究

体制を充実させようと言われた。川上先生の時代にみんなが議論したということですね。何かご記憶にある範囲で、教学改革の目的というのは他にどんなことがあったと言えますでしょうか。

川上 目的といっても、教育研究を活発にするということですから。

沖田 ひとつじゃない、たくさんですよ。まずはマスプロ教育、あと入試。あと、私が入った時には1年生でゼミがありました、社会科学入門ゼミ。それが必修だったので、落としてしまうと2年生に上がれない（笑）。そういう子がたくさんいたんですよ。たくさんいて、それがたぶん途中で進級規定が変わったんです。それとか、ゼミが2、3、4で2年生からだったんです²¹。

北口 それが3、4年になったり。

沖田 それも変わりましたよね。2年生だと早いというのもあるし、そうすると4年がまったく多摩に来なくなってしまうという話もあったり。あと、いちばん大きいのは責任をもって学生を卒業させるんだということだと思いますけれど、要は1年生から4年生までここで一貫教育と。そこで、教養部とのいろいろな話があったと思うので。

小林 それを伺いたいですね。

21 多摩移転に伴う教学改革について、『戦後50年』収録の部局史「経済学部」（495頁）によると、次の通り。「経済学部は、少人数教育の充実をはかるため、従来の原典講読にかえて社会科学入門という講座を設けた。この科目は、一年次生の四五人クラスによる必修科目として設定され、主として経済学部の専任教員の担当で行われた。一年次生が大学に入って社会科学の基礎を学びながら、どのように学習を進め、専門書を読みレポートをいかにして書くかなど、きめ細かい教育が目指された。そしてこの社会科学入門は、専任教員によるクラス担任制の基礎となり、一年次学生の大学生活の基盤ともなった。（中略）ゼミの開始を三年次生から二年次生に降ろし、早くからゼミの教育に参加できるようにし、四年次生には四単位の卒業論文を新しく設けた。」

沖田 そこは壮絶なところがあったんじゃないかなとは思いますが。一貫教育はやっぱり多摩で。それは社会学部も同じだったと思えますけど、社会学部も経済学部も4年間一貫で。

梅崎 ここで縦割りでちゃんとやると。

沖田 おそらく縦割りの教育をするということに対する解釈がいろいろ学内であって、誤解がいろいろあったのではないかと。新学部もそれでちょっと、一教（第一教養部）、二教（第二教養部）の先生たちで学部を作ることになっていた。そのへんはどうなんですかね。先生たちには、縦というのでこだわりが今でもあるわけですよ。

川上 もともとのタテ・ヨコ問題というのは、わりに単純な形で対立していたんですけど、い

ま考えてみると、もっと多様な結びつき方を工夫してよかったんじゃないかというふうに思いますね。しかし、学部の制度が別だと、なかなかそういう制度的自由に発想してやるということとはできないですから²²。

小林 社会学部も同じような状況で、一緒に共同して考えたんですか。それとも、それぞれ別々に。

川上 いや、なんか、社会学部と一緒に議論して、変えたということはあまり記憶がないんですね。大きい方向でいうと同じ方向を向いていたんだらうけれども。

北口 経営学部はいかがですか。

川上 経営学部というのは、わりに早い時に国旗を翻しました（笑）²³。

22 『戦後50年』（267-268頁）によると、1984年の「多摩移転後の経済学部・社会学部が、みずから四年間一貫教育を行うという、いわゆるタテ割りの教学改革を行おうとしているのに対し、従来の学則にもとづいて教養部が全学部の一、二年次の教養課程をヨコ割りで担当することを主張して、対立が顕在化した。」そして、同課程のカリキュラム権と人事権は教養部にあることを前提にしながら2学部との移籍交渉が進展し始めた矢先、申請を取り下げた「文化科学部」に参加予定だった学外教員を、2学部が教養科目担当として採用したことが判明し、教養部が反発。当該の学外教員は初年度の教養科目を担当しないことなどを条件に合意するに至ったが、この問題は新学部設置まで続いた。

前掲『法政大学経済学部多摩移転二〇年史』では、移転に伴うタテ・ヨコ問題について、多くの紙幅を費やしているが、最後を「縦割り問題、つまり移転学部の教養科目編成権、その人事と第一教養部のカリキュラム編成権、人事権との本質的な確執問題は、多摩開校とともにあいまいなまま棚上げされていっただけであった。」（72頁）と締め括っている。

なお、新学部設置の経緯は後述するが、1999年4月、一教の教員が14名移籍する形で「国際文化学部」が、同じく二教から22名が移籍して「人間環境学部」が新設され、カリキュラムや人事についてその後も検討が継続された結果、2003年をもって教養部の幕が下ろされた（『戦後50年』785-788、814-824頁）。

23 1980年頃の状況について、『戦後50年』（252-253頁）によると、次の通り。

「大内時代のマスプロ大学化のいわば最大の被害者であり『法政大学研究・教育体制懇話会』に川上忠雄ら有力メンバーを出していた経済学部、および、麻布校舎での工学部と同居しての出発以来、劣悪な教育・研究条件の克服を悲願とし、町田校地取得のさい担当理事として中心的役割を果たした栢野晴夫の出身学部である社会学部は、広大な新キャンパスでの理想的な学部づくりに最も熱心であった。それに対して、法学部は『本部とともにある』と称して、成りゆき任せともいふべきシニカルでどっちつかずの姿勢であり、また、伝統的に多くの学科に分かれ少人数教育でやってきた文学部は、移転の必要を感じること少なく、冷淡な否定的対応をしめし、さらに、当初移転に積極的だった経営学部も、むしろ都心型大学の立地を生かして市ヶ谷再

梅崎 もともとは、一緒に多摩に来る予定だった。

沖田 経済の向かい側に経営学部が来る予定だったと聞いています。

川上 経営学部の中の何人かの人が強力に反対をして、それで潰れたんですね。

小林 それは大きな分かれ目ですね。

北口 経済学部の中でも反対した人はいるんですか。

川上 経済の中では、結局一人もいなかったです。僕の睨みで(笑)、みんな睨み殺しちゃった。

小林 睨みと、人望ですね、先生。

沖田 川上先生はストレートに、学生も教育しなければいけないし自分たちの研究も進めなければいけないし、その教学改革という思いでストレートに伝えているから、睨まれると反対できない(笑)、と思いますけどね。

梅崎 教学改革への思いがあるから、ちゃんと反対する人を説得できる。

小林 「嫌だ」とか、そういうんじゃないと。

梅崎 教学改革というのは、全体の学生のことを考えているということですね。ただ、やってみると、先ほどいった縦割りをやるにしても、教養課程の問題だとか縦横関係というものに関して問題が出てくる。摩擦が出てくる。学部長としては一個一個聞いて解決していくしかないということになりますから、ものすごく交渉案件が増えますよね。すんなりというわけではない、制度が複雑に入り組んでしまっていると思いますので。

小林 移ってみて、「あれっ」とか、意外と困ったこととか、出てきた問題というのはおあり

だったんですか。

川上 移ってみて意外に困ったというのは、そんなに、なんか頭に来るほどなかったと思うんですけど。

小林 わりと思い描いていた改革が走り出したという感じですか。

川上 改革は走り出したけど、思い描いたように走り出したわけではないんですけどね。

小林 どんなところが違ったんでしょう。

川上 さあ、どこが違っていたのかな。

沖田 市ヶ谷に残っているよりは、こっちに来たほうがよかったとか。

川上 市ヶ谷に残っていたほうがよかったなんていう考えは、ぜんぜん浮かばなかったです。

沖田 私が学生で入学した時は、多摩キャンパスが開設されて2年目ですけども、経済も社会も先生たちは明るかったですよ。その当時は、やる気ではないですけど、新しいところで新しいものをつくっていくという、そういう思いを感じましたね。

小林 カリキュラムとかそういうのもみんな新しくしたんですね。

沖田 ええ、そうです。

小林 それは高揚感ありますね、きっと。

沖田 で、多くの留年者が出るわけですよ(笑)。理想が高いものですから。

北口 学生に求めるものも。

梅崎 多摩に移ったから、ゼミを下に降ろすみたいなことをやっても、先ほどおっしゃったように、ゼミの部屋があるわけじゃないですか。だから、そういうようなスペースも確保できた上で、さまざまな演習形式の授業ができるよう

開発の方向を目指すべきだとする論が台頭して、学部内の意見が二分し、結論が出せない状態であった。」

になったということですよ。

沖田 間違いなく、市ヶ谷ではできなかったですね。

梅崎 そして、社会科学入門が、先ほどおっしゃったプラス必修ですね。もう少しカリキュラムの系統性とか、必修はここまでで基礎はこうで選択はこうでというのをもう一回練り直すというのを、学部できちっと議論したということになりますか。

ところで、当時、学部長時代に、主任とか副主任とか一緒にお仕事をされた方というのはどういう方々になるのでしょうか。

川上 一緒に執行部をやったというのは、伊藤君というのが主任だったですね。それから、絵所君が副主任だったか。

北口 伊藤陽一先生とえしよひでき絵所秀紀先生ですね。

川上 はい²⁴。

小林 ちょうど多摩移転は、中村（哲）総長時代の最後のところですけども、やっぱり移転において中村総長だったということは大きいんですか。

川上 あまり関係していないけれど、反対はしなかったですからね。

北口 中村哲先生は、総長として多摩移転についてどういう立ち位置にいたんですか。

川上 もちろん、複数学部の移転という立場でした。

小林 「好きにやれ、金は出す」という感じだったんですか。

川上 総長が「金は出す」と言っても、実際に

は経済学部が出していることになるんですから。

小林 そうなんですか。そんな会計制度なんですか。

川上 いや、結局、誰が金を出すかといったら、誰がどこに納めているかで決まるわけでしょう。

小林 なるほど。学生数が多い学部が発言権が大きいと。

川上 はい。

沖田 余計に取っていましたし（笑）。

小林 当時、定員管理が厳しくないから。

沖田 その時はあったと思いますけどね。定員管理がぜんぜんない時代はもうちょっと前ですよ。

川上 そうですね。

沖田 60年代後半から70年代、本当に学生運動が盛んな頃とかそのちょっと前とかは、入学者がどんどん増えていましたから。

8. 全面移転か部分移転か

北口 法政大学というと、筆頭学部は法学部というイメージがありますが、法学部と経済学部の関係はどんな感じなんですか。

川上 あまりそういうことで、法学部と経済学部で比べたことはないんですけどね。経済学部のほうは法学部を別にそんなに邪魔者とも思っていないし、まあ筆頭学部としてあるんだというぐらいなものです。

北口 多摩に経済学部が移転するという時も、

24 前掲『法政大学経済学部多摩移転二〇年史』（83頁）によると、川上学部長時代の経済学部執行部は次の通り。

1981年度：伊藤陽一主任、絵所秀紀副主任／1982年度：伊藤陽一主任、霧見誠良副主任

法学部としては「どうぞ」という感じだったんですか。

川上 法学部は、そういう体質はないんですよ。だから、初めから法学部を説得するなんていうことはぜんぜん考えていなかったです。

小林 下森先生はその時、移りたいというのはなかったんですか。

川上 下森さんは、どうだったのかな。そのことで下森さんとちゃんと話したことはないんですけど。

沖田 問題点としては同じ思いを持って、「この状態では駄目だ」と思っていたけれども、経済が多摩に行くんだったら市ヶ谷を再開発して(笑)。

北口 なるほど、法学部としては市ヶ谷に残るので、どうぞと。

沖田 あの時はだから、市ヶ谷を売ってしまっただけ全部こっちに来るというのが途中で変わったんだと思うんですよ。市ヶ谷の再開発という話になった途端に、「じゃあ、残りたい」ということが出てきたんだと(笑)。

川上 いやあ、全部移るなんていう話は、中で議論していた時に教授会レベルではなかったですよ。

沖田 ないですか。こっちのキャンパスに全部持って来るって私は聞いていたんですけど、でもそんなことはなかったですか。

川上 ええ²⁵。

沖田 でも、確かに、場所はそんなにないですよ。本部をこっちに持って来るという構想はあったのでは？

小林 それで総長室があるわけですね。

沖田 そうか、法学部は最初から……。最初、経営というのがあったと。あと新学部が2つ。2つと言っていましたけど、1本の構想が3つぐらいだと思いますけど。

北口 でも、一時期、工学部も多摩に移ろうかという話が出て、結局、それも途中でなくなって、1年生だけが多摩に通ってまた小金井に戻るといふ。工学部校舎が確かできていましたね。

沖田 18号館ですね。

梅崎 人が移動するみたいな話になると、なかなかうまく合意が得られないというか。

小林 増田(壽男)先生が、市川にお住まいになってこっちに来るのをよく「うん」と言われましたね。

川上 いや、それは市ヶ谷にいる人だけじゃなくて、経済学部の全員が移るといふふうになったんですから。

沖田 松崎(義)先生も千葉から通っていましたね。

梅崎 だいたいどんな感じだったんでしょうね。細かい話ですけど、川上先生のように引越しをされたという方とそのまま通うんだとい

25 『戦後50年』(244-255頁)によると、全面移転か部分移転かの議論は二転三転している。前述した総計審答申(1969年7月)では「すべての大学の諸施設」を町田へという表現であったが、1974年3月の総合計画作成委員会の答申では2つの新学部を町田に設置する部分移転という構想に移った。その後、しだいに当面は新設の1学部、および既設2ないし3学部移転が望ましいという論が優勢になり、1978年4月に新入生向けに発表された「町田校地開発について」のなかでも、「町田校地に設置する学部は二学部程度」とされた。ところが翌年の第二次教学問題委員会中間報告では、ふたたび町田への全面移転の方針が打ち出され、1980年代に入ると、各学部温度差が生じたことは前述の通りで、とりわけ、経営学部が全面移転反対を強く主張した。

う方と。転居には補助が出たという話ですが。

沖田 低金利の。多摩キャンパスができた当時は、教職員が多摩の近くに家を買う時に金利を安く大学からお金を借りられましたよね。職員はけっこう、それを狙ってこっちに。(多摩キャンパス近隣の)グリーンヒル寺田とかけっこう住んでたりしました。

北口 そんな近くに住んでいるんですね。

小林 その制度は、川上先生がお作りになったわけではない？

沖田 それはもうちょっと前だと思うんですけど。先生が役員になる前だと思います。

梅崎 それを決めたのは理事で、川上先生はその時代は学部長ですから、経済学部の中の教学改革という感じですね。確かに、家を買ったりしていたら、簡単に売るわけにもいかないですし、売れなかったりするし、どうしようかなみたいな感じになりますね。

小林 先生、学部長時代を振り返られて、思い出は今だいたいおっしゃったような感じですか。何かさらに学部長時代の思い出というのは。

川上 いやあ、もう忘れちゃってますよ。

沖田 経済学部に、一教から来ている先生もいましたよね²⁶。

川上 うん。

沖田 それと別に、経済で採用した先生もいますよね。それは、ぜんぜん問題なかったんですか。

川上 それは、仲が悪いとか何かで問題を起こすということはぜんぜんなかったね。

沖田 じゃあ、経済は経済で採用して、縦なんだという、そういう共通の認識があったんですね。一教から移る人も普通に移れて。

川上 うん。

沖田 じゃあ、言われているような、そんなにタテ・ヨコですごかったというのは、なかった感じなんですかね。

川上 タテ・ヨコで問題があったというのは、縦でやってる学部の執行部と横でやってる学部の執行部と、これが利害関係があったわけですよ。

沖田 今、経済の時に一教から来た教養の先生もいらっしゃったし、経済学部で採用した、曾村(充利)先生もそうですけどいらっしゃって、特に一教から何かなかったんですかとお聞きしたら、現場ではぜんぜん仲が悪かったというのはなくて、仲が悪かったのは執行部同士だったと(笑)。

川上 本当にそうですよ。

小林 本当に仲が悪かったんですか。単に利害対立だけではなくて、仲が悪かったんですか。

川上 まあ、利害対立ですよ。

沖田 それは、人事というよりも？

川上 カリキュラムの組み方です。

沖田 カリキュラムの組み方はイコール、たぶん人事ですよ。第二外国語の単位数を減らすとかいったら、直結ですよ。

9. 常務理事としての教学改革

梅崎 それでは、いちばん今日聞きたかったこ

26 前掲『法政大学経済学部多摩移転二〇年史』(83-84頁)によると、多摩移転に伴い、経済学部は第一教養部、第二教養部から計20名の教員を迎え入れた。また、新任教員として、曾村充利はじめ新設学部予定教員だった4名に加え、新規1名を採用した。

とでもありますけれども、常務理事時代のお仕事について伺わせていただきたいと思います。ある意味で、先生は法政大学の中で一貫した理想を持っておられて、教学改革をちゃんとやろうということであった。多摩移転も教学改革のためでした。理事になってたくさんのお仕事をされますけれども、先生のご担当というのは90年代の教学改革を進められたことになりませんか。その担当理事であったと思いますので、そのあたりのことについてお伺いできればと思います。多摩キャンパスなども軌道に乗って来た後に、90年代、理事になられた時に何がいちばん問題だと思っておられたのでしょうか。

小林 その前に、経済学部長を終わられて理事になられる間にお考えになっていたこととかを伺わなくていいですか。

梅崎 それが理事直前になるんですかね、理事の前。期間としては、だいぶスキップしてしまっているところもあるんですけどね。

小林 9年ぐらいあるんですかね。経済学部長を終わられた後、理事になられるまでの間に。

川上 9年もある？

小林 1983年まで学部長でいらっしやって、理事になられているのが93年です。

梅崎 たぶん理事になられる前からこういう教学改革をしたいとか、こういうことが問題だということを先生ご自身が感じられていたと思うんです。

小林 理事になられる前に何か感じられていた問題点とか、法政のこういうところを何とかしたいと思っていたとか。

川上 理事になる時に特に思っていたことというのは、理事になる前の時に考えてきたこととそんなに違いはないですね。流れはわりに直線でつながっていたと思います。

小林 経済学部で抱いていた教育の理想を全学に拡げていく。

川上 全学にという口幅ったいですけども、自分たちで考えてできることをやろうということ²⁷。

梅崎 総長が決まり理事に入られる時に、今でもそうですけれども、いろんな常務理事の中で担当が決まっていくわけですけども、川上先生は教学改革が主だよねとなったのは、なぜですか。総長と話し合いの中で役割分担が決まっていたわけですよ。

川上 はい。

梅崎 先生が教学改革をやりたいと言ったから回って来たのか、もしくは教学改革の実績を見ておられて、川上先生に任せたいと誰かがおっしゃられたのか。そのへんの役割分担はどういうふうに決まっていたのでしょうか。

川上 いや、それは私に聞いてもよくわからないことです。ただ、私は教学改革をやろうと考えていました。

梅崎 ご自身から「絶対これだ」というふうに

27 『戦後50年』収録の川上忠雄「教学改革について」(364頁)によると、次の通り。

「常務理事になった私が考えたのは、次のようなことでした。『何としても思いきった教学改革を通して我が大学を再生させたい。そのためには、我が大学を身動きできなくしている専門と教養、市ヶ谷と多摩、理事会と教授会、大学と卒業生といった幾層にも入り組んだ複雑な対立と不信の構造をほぐし、何とか和解にもってゆかなければならない。しかし、それには結局、他でもない、これまで三度失敗し、その度に相互不信とシニシズムを増幅させた、新学部設置を中核にする教学改革をもっと徹底した形で成功させるしかない。』」

決めたわけではないと。

小林 阿利（莫二）総長や下森先生との長年の関係がやはりあるという。

川上 はい、それはありましたね。

沖田 私が聞いた時には、担当を決める時に「私は学務担当をやるために理事になったんだから、これをやらなかったらなかった意味がない」と言って来たというふうにおっしゃっていましたよ（笑）²⁸。

川上 そうですね。忘れちゃったよ。

沖田 あの時は再選のために立候補された時だと思うんですけど、「学務担当をやるために理事に立候補したんだ」というふうに、私には確かにおっしゃいました。たぶん下森総長の頃だったと思います。

北口 先生が最初に理事に就任したときは阿利総長で、鬼塚（豊吉）先生と一緒にずっと理事をやってらっしゃいましたよね。

川上 しかし、彼のほうが、理事になったのは私よりも1期早いんじゃないかな。

北口 早いですね。鬼塚先生のほうが先に常務理事になっていらして、その後川上先生がご一緒に²⁹。鬼塚先生に誘われたんですか。

川上 どうだったかな。忘れちゃいましたね。

北口 東京大学で一緒だったとか。

川上 大学は一緒だったけど、東京大学では別

と一緒に何かをやったということはないです。法政に来てからです。

小林 巨大な大学ですからね。

10. 「21世紀の法政大学」プロジェクト検討会の発足

梅崎 まさに、1993年5月に常務理事になられて、先ほどのお話ですと教学改革をやるんだということで、2ヵ月後にはもう諮問機関として「21世紀の法政大学」プロジェクト検討会、川上先生のヘッドのプロジェクトですが、直に発足しているんですね。だから、内々もう川上先生の希望もあるし、周りの常務理事の方も「ぜひやって欲しい」ということで、こういう名前が決まったということだと思うのですが、いかがでしょうか。また、プロジェクトメンバーをどうやって選んだのでしょうか。お声を掛けた人というのはどういう方がいたのでしょうか。あと当時から新設学部の話があります。この「21世紀の法政大学」というビジョンの中で、どういうことが議論されたと考えればよろしいでしょうか。まず、メンバー選定は先生が選ばれるわけですよ。

川上 いや、そんなことはないです。私にそんな権限はないです。

梅崎 でも、お声を掛けないと、先生がヘッド

28 前掲「教学改革について」（363頁）によると、次の通り。

「『徹底した大学改革をやらせてもらえるなら、理事になってあなたを助けましょう』。多摩移転のいきさつから経済学部の有志教員の要請を断り切れなくなった時、実は阿利総長に前もってこう談判した上で、私は理事選に出たのでした。」

29 第三期阿利体制（1993年度～）の主な役員は、次の通り。

総長：阿利莫二（1988年度～）

常務理事：鬼塚豊吉（1990年度～）、川上忠雄・井坂義雄（1993年度～）

理事：石坂悦男（1993年度～）、岡島敏（1993年度～、ただし1990年度～常務理事）

なわけですから。プロジェクトリーダーが「誰々さん、お願いしますよ」というような感じだったのでは？³⁰

川上 いや、もうよく覚えていませんけど。

小林 各学部から複数の候補をあげてもらってと書かれていたのを、どこかで拝見しましたけれども。これはその時ですか、それともその後の審議会ですか。

川上 新学部を作るとか何とかいろいろ揉め事になるようなことを始める時は、前もって人をピックアップするというのが非常に重要なことになるわけですね。

小林 2014年にお話しいただいた時に、招集しようとして阿利さんのところに相談に行ったら、「私的な諮問機関ぐらいからどうだ」と。

梅崎 理事は1名、教員は5名というような人数構成で、13名でプロジェクト会議を15回ほど開きましたと。

小林 その後に、選び方が出てきますね。

梅崎 教員自体は5人。職員が4名で事務局が3名という³¹。

小林 職員に入ってもらったほうがいいというふうに先生がお考えになったのは、どうしてというか、何か背景があるんですか。

川上 いや、もともと大学教員だけで考えるというのはおかしいと思っていたんです。職員というのはどういう身分なのか。事務的な仕事だけやるのが職員なのか。そんなことはないはずで、仕事の中身をちゃんと知って、それに協力するという人でなければ務まらないわけです。

30 『戦後50年』(329頁)によると、川上理事の私的諮問機関として1993年7月に発足した「21世紀の法政大学」プロジェクト検討会のメンバーは、次の通り。

教員：江橋崇（法）、水木新平（工）、加太宏邦（社、のち相良匡俊に交代）、渡辺喜之（一教、まもなく大沢暁に交代）、山本長一（二教）

職員：塚本栄（広報部）、馬島明成（総務部）、市川文明（施設部）、佐藤友彦（通信教育部）

事務局：和田実一、谷口浩、藤間義彦（いずれも学務部）

31 「2014年のご講演」によると、プロジェクト検討会は、次の通り。

「理事は1人、教員は5人、職員が4人という構成で10人ですね。それに事務局が3人の13人でやったプロジェクトを15回ほど開きました。結局、ここで一番突っ込んだ議論がやられたんです。ここに集まったのは、教員の中でも意識が非常に高い改革の意欲を持った人たち、職員もそうです。職員4人も部次長から1人、課長から1人、主任から2人だったんですけれども。これはもう非常に意識の高い意欲のある人を自薦・他薦で募って出てもらった。私がみんな知っていたわけじゃなくて、募って出てもらった。教員の場合は学部長に推薦してもらったわけです。そういう13人。この13人が徹底して議論をやり、15回も会議をやった。公聴会も開いた。外からも意見を募ったわけですね。（中略）

最初にこの「21世紀の法政大学」審議회를招集しようと思って、私は学務担当理事で、当時の総長は阿利総長だったんですけれども、阿利さんのところへ、やろうと相談に行っただけです。『君、そんなこと最初からやったら、うまくいかないよと。そんなことはやめて君の私的な諮問機関ぐらいから始めたらどうだ』と冷やかに言われたんです。

その意味が当時の私には分かっていなかった。後になって考えてみると、阿利さんがそう言ったというのは、非常に正当なアドバイスだったんですね。この狼煙を上げる作業というので、本当によりすぐりのメンバーで集まって夜中遅くまで検討して、よその大学まで出掛けて調べたりということをやったことが、結局改革の基になったんです。大きなことをやるときには、こういう前段が必要だということなんですね。」

ね。というふうに思っていましたから。

小林 この前に潰れてしまった学部構想には職員は関わってなくて、ここで初めて教学改革に職員が関わるようになっていくんですか。

川上 そう言っていていいかもしれませんね。私がやれる時は、職員をずいぶん登用してプロジェクトをやるというふうに初めから考えていましたから。

小林 理事会に職員理事が入るようになったのは、もっと後ですかね。

川上 いや、その頃から職員理事というのはいたんですけれども、その職員理事というのはそんな中身のあることはやっていなかったんじゃないですか。

梅崎 2014年のときのお話の中でいうと、会社だと社長直轄みたいな、従来の部門と切り離していますね。改革の狼煙を上げたということになる。切れたことにすることによって自由な議論ができるようになっていく。逆に、途中で「あれは何をやっているんだ」という声も聞こえて来たと。端的に言えば既得権益みたいなもの

のはこの中の議論に入ってこないように、先生自体がうまく設計されたのかなと思ったのですが。つなげてしまうと「いや、俺の部署の利害があるんだ」とか、いろんなことが出て来ちゃうので、切り離した機関として、そのかわり教学に関しては本当に未来を考える人だけ話しましょうという、そんな感じですか³²。

11. 「21世紀の法政大学」審議会に発展

小林 このプロジェクト検討会の人達には、先ほど中にはその後の審議会には入れなかった方々もいらっしゃるみたいなことを伺いましたけれども³³。

沖田 職員が。

小林 教員はほとんどみんな、そのまま移行したんですか。

川上 そのあたり、もう記憶が定かではないですね。

沖田 職員で佐藤（友彦）さんがいましたよね。プロジェクト検討会には入っていたんですけど、審議会メンバーには入らなくて、非常に

32 1994年2月に「21世紀の法政大学」プロジェクト検討会が発表した「21世紀の法政大学—中間報告書」の主な目次は、次の通り。

- A. 大学をめぐる情勢の大きな変化
- B. 戦後の法政大学の歩みを振り返って
- C. 「自由と進歩」…すべての構成員の自律と自己実現のために
- D. 時代に応える思い切った教学改革
- E. 学生にどのような場と教育を提供するのか
- F. いかに教員を集め、育てるのか
- G. 健全な財政基盤を持ち活力にあふれた大学経営
- H. 職員に何を求めるのか
- I. 市ヶ谷再開発と3キャンパスの有機的連携をもって21世紀の夢のある大学へ

33 1993年7月発足の「21世紀の法政大学」プロジェクト検討会などを踏まえ、翌年5月、総長＝理事長の公式諮問機関として「21世紀の法政大学」審議会規程が制定された。同審議会の答申をもとに、1996年1月に教学改革本部が設置された。

残念がっていました³⁴。プロジェクト検討会はみんな就業時間が終わった後に集まって、プロジェクト報告書を書き上げるのにかなりボランティアでやっていたので。そういう意味でも私的な諮問機関なので、職員にとってもボランティアになってしまっていましたね。

小林 今だとできないですね。

沖田 今やると、労働時間の問題とかがありません(笑)。

梅崎 でも、今後、21世紀の中でも新設学部のことを話し合った時に、また利害関係がすごく出てきてしまうという。

小林 そうですね。私的なところだと個人の意見が言えますけど、学部を背負っていたら、学部の利害に反することは言えなくなっちゃいますもんね。

梅崎 先生もお話になっていますけど、「新設学部設置準備委員会と違う形で議論ができる場をつくりたかった」という、やはりフラットな議論ができる。

小林 阿利先生のアドバイスが人を集める上で正当だったとお話になっていましたけど、後から振り返ると、阿利先生自体はそんなに改革に熱心ではなかったんですか。

川上 いや、阿利さんは「改革をやってくれ」という考えははっきり持っていましたね³⁵。だから、ぜんぜん邪魔にならないで、うちらが考えるように動けたんです。

小林 いいですね。良きようにはからえという。

北口 この時期は、一教の井坂義雄先生も一緒に常務理事としてやっていて、井坂先生が市ヶ谷開発とかカリキュラムのほうの私的諮問機関を作っているというのは、阿利先生が21世紀の改革は川上先生に、市ヶ谷開発は井坂先生に任せたということなんですか。

川上 そうでしょうね。

北口 阿利先生の晩年の頃になりますかね。

川上 そうです。

沖田 途中で入院されたりして。でも、21世紀は教学改革がメインですけど、もっといろん

34 『「21世紀の法政大学」審議会ニュース』Vol.17 (1996年7月19日)によると、「21世紀の法政大学」審議会委員のメンバーは以下の通り。

担当理事：川上忠雄

教員：江橋崇(法)、堀江拓充(文)、平林千牧(経、1995年7月～増田寿男に交代)、稲田太郎(工、1996年4月まで)、大山博(社)、小川孔輔(営)、小池康郎(一教)、高木利夫(二教)、二村一夫(大原社研)

職員：嶋津靖定(経理部長)、上城功(多摩総務部長)、白坂桂吉(工学部事務部長)、塚本栄(広報部次長)、小野瀬敬二(保健体育部次長)、馬鳥明成(文書課長)、原勲(人事課長)、藤間義彦(多摩学務課長補佐)、小川純一郎(第一中・高等学校長)、田中良子(女子高等学校教諭)

事務局：和田実一(学務課長)、谷口浩(学務課長補佐、1995年3月まで)、廣岡康久(1995年4月～1996年3月)、沖田吉史(1994年11月～)

35 第三期阿利体制が発足した直後の『学内ニュース』No.110(1993年6月15日)には、阿利総長名で、次の5項目からなる「本学当面の課題」が掲載された。このうち「3. 教学改革」の筆頭に「大学改革のヴィジョン作成」が掲げられ、川上理事の私的諮問機関として、同年7月「21世紀の法政大学」プロジェクト検討会が発足するに至った。

1. 経営体制の改善／2. 市ヶ谷再開発(建て替えと暫定的施設改善)／3. 教学改革／4. 多摩校地の課題／5. 工学部新棟完成と新学科体制の育成／6. 付属校問題

な課題が出てきましたよね。投げかけもすごく幅広かったです。学生生活とか、憩いの場みたいなものも含めて。あと入試もあったし卒業生もあったし、これからは情報化だ、国際化だ、あと女性の今のダイバーシティにつながるようなものとか、いろんな課題を全部みんなに言わせたというような³⁶。

小林 課題の棚卸しですね。

沖田 その項目というの、阿利先生からの諮問だったんですけど、もう下書きは川上先生が。

川上 そうですね。阿利さんに指図された覚え

はないですね。

沖田 そんなにたくさんの課題を掲げてみんなに議論してもらおうという、本当の狙いはどこにあったのでしょうか。

川上 いやあ、だいたい何でも大風呂敷を掲げてやるというのが私の主義でしたから（笑）。

梅崎 法政みたいな大学組織だと、まず一回とことん言ってもらって大きな風呂敷をつくらないと、うまく回らないのかなと、伺っていて思いました。

小林 その後ないですもんね、大きな風呂敷は

36 『「21世紀の法政大学」審議会ニュース』Vol.1（1994年9月28日）によると、阿利総長からの諮問事項は次の通り。

1. 理念と目標…（大学の使命、本学の拠って立つ教育理念、学風、大学の自治と学生の自治）
2. 入試制度・推薦入学制度の見直し…（受験戦争の弊害対策、多様化）
3. 大学と付属校の関係のあり方…（一貫教育、相互交流）
4. カリキュラム改革…（専門教育と教養教育、単位互換、他大学との交流）
5. 学部ごとの特色ある教育…（「開かれた学部」、学部裁量の予算枠）
6. 大学院拡充…（高度専門教育、大学院大学、研究者養成）
7. 教学組織のあり方…（学部・教養部・二部・通信教育部・大学院の再編、生涯学習、新学部新学科）
8. 研究体制のあり方…（学術的研究活動の組織、図書館—資料室—研究所の関係、教育組織と研究組織の関係、研究費の総合的把握と計画的配分）
9. 3キャンパス体制…（個性あるキャンパスのあり方、3キャンパス間の連携）
10. キャンパス・ライフの設計…（キャンパス・カラー、デザイン、厚生施設、「開かれた大学」）
11. 国際化…（キャンパスの国際化、留学生、客員教授、研究員、学术交流拠点）
12. 情報化…（ネットワーク化、データ・ベースの作成、手続きの簡素化、情報公開）
13. 就職支援…（就職先の開拓、職業観の形成）
14. 大学と卒業生の関係のあり方…（交流強化、校友会館、基金と寄付）
15. 意思決定機構のあり方…（法人と学校、理事会、学部長会議）
16. 職員の役割の見直し…（基本的構成員、教育研究への支援の高度化、経営の担い手）
17. 事務組織の再編…（統廃合、業務分析、活性化とスリム化）
18. 人事諸制度の改革…（人事採用、労働時間、資格試験制度、登用制度、研修制度、人事異動、職員の活性化）

また、上記18項目（テーマ）をグルーピングし、各作業部会が発足した。計11の作業部会および、各諮問項目No、座長は次の通り。川上理事が担当した作業部会は第二、第三、第八である。

第一作業部会：テーマ2・3・13、江橋／第二作業部会：テーマ5・7・4、平林／第三作業部会：テーマ6、小川（孔）／第四作業部会：テーマ8、二村／第五作業部会：テーマ9、堀江／第六作業部会：テーマ10、大山／第七作業部会：テーマ14、稲田／第八作業部会：テーマ16・17・18、白坂／第九作業部会：テーマ12、増田／第一〇作業部会：テーマ11、小池／第一一作業部会：テーマ女性と大学、江橋

一度も。

梅崎 なんかタコ壺に入っていますよね。我々、現役世代がちゃんとやらなくてはいけないんでしょうけれども。

北口 「21世紀の法政大学」というネーミングもダイナミックだなと思いました。この名前の付け方というのは、川上先生が考えたんですか。

川上 そうです。

沖田 できた当方で、もうあと10年ないと言っていましたね。

北口 なるほど、21世紀まで。

小林 危機感を煽るわけですね。確かに、7年前に伺ったときも、やっぱり先生ご自身がすごい危機感を抱かれていたんだというのが伝わってきましたけれども、そのご記憶というのがありますか。当時の危機感について。

川上 いやもう、危機感の塊みたいなものだったですから。

小林 危機の原因を全部突き止めるぞという、その項目をたくさん出すのもそういう感じですか。

沖田 ちょうど1992年ぐらいですかね、18歳人口がいちばん山に来て、これから18歳が減って来る。もらってた臨時定員も手放していく³⁷。その時に、魅力ある大学でなければという、危機感を煽っていました。

北口 法政大学だけではなくて、日本の大学全体が転換期を迎えるという危機感みたいなところ

もあつたんですね。

小林 それまでに何かやった大学がポロポロある中で、法政は何もできなかったとおっしゃっていましたね。何もできないまま92年を迎えた。

北口 法政大学はずっと学生運動をしていたイメージがすごく強いです。

川上 いや、学生運動をやっている、それで何かを生み出していれば、それはそれでいいんですけれども、教員たちは何も生み出せなかったんですね。

北口 生み出せなかったという思いがあるんですね。

梅崎 法政は非常に自由なところで議論に関してはフラットなんだけれども、先生もどこかでお書きになっていたと思いますけれども、民主的に投票して決めるんだけど、誰か一人に任せってしまったら後は任せっぱなしになってしまうみたいな。結果は問わないでいいよねと。任せっぱなしになっちゃう。それだったら、下から上がって来ない意見でないとな本当の改革はやりにくいですよ。先生がメンバーを集めたり、それを発信したりしたのも、やる気のない教員に向けて、人を巻き込む手段だったのかなと思うんですけれども、いかがですか。「やれ」と言ってもなかなかやらないですよ。

川上 そういうもどかしさというか、それは非常につきまとっていましたね。

37 『「21世紀の法政大学」審議会ニュース』No. 3 (1995年1月30日)に掲載された第二作業部会の報告によると、次の通り。

「直ちに展望を得なければならない要件として次の2点がある。その第1は、臨時定員増→第1期—320、第2期—400＝計720によって得られた収入(約26億円)の改革による確保である。第2は、18歳人口減少(指数、1994年＝100、2000年＝70) 大学進学者数減少が、すでに第2部学生の減少として表れている状況に、改革によっていかに対処するかである。」

梅崎 本来ならば教学改革はみんなで取り組むことなのだけれども、「川上先生がやってくれたら、じゃあ、俺も手伝うよ」ではなくて、「川上先生がやっているからお願いします」ということで任せてしまう。一学科ぐらいだったら何とかなるけど、全学のものだと難しいですよ。大きなものを動かしていくという。

12. 4学部を同時に新設（教学改革本部）

小林 「国際文化情報学部」とか「人間環境学部」³⁸というのは、メンバーの先生方の中から出てきたんですか。それとも、時代を見ながら先生がリードする形で、これらの4分野というふうにお考えになったんですか。

川上 そういう学部の名前をつけるのに最初に私が音頭をとったというのは、それほどないと思うんですね。みんなやっぱり関心のある人がいて、メンバーの中から出てきたのを拾い上げて、それを盛り立てるといって、そういうやり方でやってきたと思うんですけど。

小林 そのアイデアを取り立ててもらったから、どんどんやる気が出て来て、そして学部になっていくという。

沖田 あの一教をベースにした学部にする時にトップに立てる人は、そのへん川上先生はよく覚えてらっしゃるかわからないですけど、川村湊先生³⁹みたいな人でないと、逆に色が強いかリーダーシップをとる人だと反対側の人も出

38 1996年1月、法人と教学が一堂に会する公式諮問機関であり、教学組織を通じた全学的合意を実現するための組織として「教学改革本部」が発足した。『教学改革本部ニュース』No.4（1996年4月30日）によると、1996年4月時点の「教学改革本部」メンバーは次の通り。

本部長：下森定総長

副本部長：川上忠雄担当理事

法人側：学内理事の鬼塚豊吉・井坂義雄・石坂悦男・岡島敏

教学側：各学部長・教養部長、大学院委員会議長、各学部・教養部教授会主任

その他：堀江拓充（文）、稲田太郎（工）、羽場久泥子（社）、鈴木武（営）、高木利夫（二教）、鈴木佑司（法・学生部長）、清原孟（経・多摩学生部長）

職員：白坂桂吉学務部長

事務室：川上室長、和田実一次長、谷口浩事務課長、廣岡康久、伊東利晴、星崎亨子、生田眞敏、事務室補佐として堀内捷三（法）、増田寿男（経）、渡辺喜之（一教）

また、『教学改革本部ニュース』No.5（1997年3月10日）によると、1996年11月に清成忠男総長（同年6月就任）へ答申が提出された。その構成は次の通りで、「1. 新学部の設置について」では、二部の改組転換による「人間環境学部」（仮称）、市ヶ谷諸組織の改組転換にともなう「国際文化情報学部」（仮称）、多摩地区の新定員による「都市文化デザイン学部」（仮称）、理系新学部として「応用科学部」（仮称）の四新学部設置が提案された。

1. 新学部の設置について／2. 昼夜開講制の導入について／3. 学生定員の抛出について／4. 構成員の配置について／5. 教養教育の在り方と組織について／6. その他

39 『教学改革ニュース』No.7（1997年12月5日）によると、1996年11月の答申で提案された前出の4学部のうち、市ヶ谷地区の人間環境学部（仮称）、国際文化情報学部（仮称）の2つから取り掛かることとなり、前者に堀内行蔵（営）、後者に川村湊（一教）をそれぞれ委員長とする設置準備委員会が設けられ、1997年9月には文部省の設置認可を受けた。いずれも第一教養部・第二教養部の改組転換を含むものであった一方で、

てきたりするのです。

小林 なるほど、いろいろ受け流せるタイプですね。適材適所。

沖田 先生は覚えてらっしゃるかどうかわかりませんが、その時というのは一教の先生たち全員から履歴書と業績書を判子をつけてもらって、誰に行ってもらってもいいようにしておいて議論を。

川上 そんなことをやったんですか（笑）。

小林 でも、設置審（大学設置・学校法人審議会）に関わりますからね。

沖田 まだその時は、最後の厳しい審査の時代だったので。2年審査でしたので、2年間かけて審査をして。川上先生は、川村湊先生ぐらい飄々としている人でないとやっぱり駄目だということだったんですか。

梅崎 人間環境学部は堀内（行蔵）先生で、あと福祉は大山（博）先生。

小林 一教と二教はだいぶ雰囲気が違ったんじゃないかなと思うんですけれども、人間環境学部を作るというのはどういうところから生まれてきたんですか。

川上 いや、一教と二教の中身がどうだったかというのを、それほど私がよく知って事を運んだわけではないんですよ。

小林 出てきたものを、形にすると。

川上 はい。メンバーから出てきたものをあれこれ言って、「駄目だ」とか言うのだいたい駄目になるんですよ（笑）。

北口 でも、最終的には4つの学部に着いて

たということですか。

梅崎 このへんは清成（忠男）先生のリーダーシップも、総長になられてから4つになったという⁴⁰。

小林 清成先生との役割分担とか、リーダーシップ関係ですね。

川上 役割分担というのはどういうことだったかな。あまり彼と腹を割って相談したということもないんですけどね。

小林 では、清成先生はどちらかというと経営者ですかね。経営をやってもらって、先生が教学の担当でという。

川上 そうですね。

沖田 国際文化の川村先生は、たぶん川上先生が周りの方と相談して「こういう人」と。人間環境の堀内先生は、もともと経営学部いらっしやっていて、それで清成先生が同じ経営学部同士で堀内先生に声を掛けたような、そんな印象を持っていました。

小林 よくまとまりましたね、それでね。

沖田 その時は大学の定員は原則抑制なので、新しく学部ができるとすれば、国際系と環境系と福祉と情報科学などの分野に限られていました。

小林 いつも沖田部長が「法政学の招待」という授業でお話くださっていた、あれ。

沖田 その分野に何とか合うような、そんな4つという。各キャンパスにというのはちょっと、どうしてかというのはわからないですけど。

全くの新設となる残る2学部については作業を進めるうちに当初の構想を見直す必要が生じ、多摩キャンパスに地域福祉学部（仮称）、小金井キャンパスに情報理学部（仮称）の設置を目指すこととなり、前者は大山博（社）、後者は大森健児（工）を委員長とする設置準備委員会が発足した。

40 1996年6月、下森定氏に代わって清成忠男氏が総長に就任。前述の通り、同年1月に発足していた教学改革本部の答申は清成総長に提出された。

小林 確かに、3キャンパスがバラバラでは駄目だということを先生は繰り返しいろんなところで書かれていたり、発言されていますね。やっぱり、多摩キャンパスも発展させて小金井も発展させてという思いがおありでいらっしやいましたか。

川上 それはそうですよ。3キャンパス全体がそれぞれ発展して、その総合として3キャンパスの法政大学というのはある、という考えでしたからね⁴¹。

小林 一教、二教をなんとかする、それプラス多摩と小金井に1つずつという。市ヶ谷に一教、二教をなんとか2学部にして、多摩に1つ、小金井に1つ、それで4つという構想ですか。

川上 そんなに確定的に4つを割った記憶はないですけどね⁴²。

小林 結果的にそうなった。

川上 もっと、そういう構想をしている時は柔軟に考えてやりました。

梅崎 1学部ずつ「新設をやろうよ」と言ったらたいい失敗してしまって、最初から「4やるよ」というふうに言ってしまったほうが、周

りも改革ムードになるというか、改革するんだなと、後戻りはもうできないんだなというムードになった。

川上 それはそれで大事な事実で、そういうムードがあったんですね、確かに。こっちも驚いたぐらいで、それで反対が消えちゃったんです。

小林 やりたいことをみんなやっていいんだというふうになるんですかね。

梅崎 今のコロナ禍の政府の発表とかでも、小出しにされると「まあ、いいか」、「まだ大丈夫だな」みたいな。何が大丈夫なのかかわからないけれども、現状維持のままでいいんだみたいな感じだと思うんです。「4」と出されると、ちょっと改革するしかないみたいな。常務理事以下、全員本気だぞという。

小林 市ヶ谷の2学部はともかく、現代福祉と情報科学は人を全部、新しく取っているんですか。

沖田 いや、全員じゃないんです。

小林 一部が移動して、新しく採った人もいる。

沖田 学生定員を増やせるのは23区以外だっ

41 『教学改革本部ニュース』No.6 (1997年7月30日)に掲載された川上副本部長の話によると、次の通り。「教学改革本部会議が答申をまとめ、96年11月14日に堀江議長が答申を構成し、総長に提出して以来、教学改革は待ちに待った実行段階に入りました。『21世紀へ向けて3つのキャンパスに新しい魅力を』という願いはいよいよ実現のときを迎えたのです。」

42 『教学改革本部ニュース』No.3 (1996年3月25日)によると、教学改革本部で審議すべき総長諮問については、教学改革企画委員会に付託された。付託事項は以下の通り。

1. 市ヶ谷諸組織における二部の改組転換により、生涯学習を内容とする新学部の設置、改組転換に伴う既存組織の扱いおよびその構成員の配置、改組転換後の教養教育のあり方、および昼夜開講制の導入。
2. 市ヶ谷諸組織の改組転換により、人文科学系中心の新学部の設置、改組転換に伴う既存組織の扱いおよびその構成員の配置、改組転換後の教養教育のあり方。
3. 多摩地区に、新定員（または経済・社会学部からの一部抛出も含む）による社会科学系中心の学部の新設。
4. 理系1学科の増設による工学部の改組転換、および改組転換後の教養教育のあり方。
5. プロジェクト・チームの設置数とその構成について

たので、ですから多摩と小金井は新しい定員を取れる。

小林 なるほど。ギリギリでしたね、それでいうと。

沖田 その当時も、今もそうですけど、財政問題というのがやっぱりあって、学部を作るのにお金がいるというところで、だいぶ鬼塚先生と川上先生は話し合いをされていた。

小林 7年前のお話の時には聞き流していましたけど、確かに4つ学部をつくって、それが1年生しかいなかったり2年生しかいなかったりという時代が2年、3年続くというのは厳しいですよ⁴³。それは、鬼塚先生にどう理解してもらったとか、あるんですか。

川上 いやあ、何とか財政を担当する鬼塚さんのほうに皺が寄らないように、いろいろこっちで考えたんですけどね。

小林 例えば？

川上 例えば、何を考えたんだっただけかな。

沖田 やっぱりこっちで新しい定員を取るとかですね。学生が増えないと。市ヶ谷のほうは学生が増えていないんですよ。抛出しているだけなんで。

北口 ちょうど市ヶ谷のほうでボアソナード・タワーを建てたりとか、ものすごいお金がかかっていた頃に4学部もまたさらに増やしてという、今となってはすごい時代ですね。

小林 新しくビルを建てて4学部をつくってという、改革する大学というのはバンと出ましたね。

沖田 だから、確かにお金はかかったんだと思いますけど、財政問題を解決するには教学改革しかないというのは、川上先生はよく言われていて。

北口 両輪になってくるんですね。

川上 それはよく言ってたね、あの当時⁴⁴。

43 「2014年のご講演」によると、次の通り。

「新学部をつくるときには、4年間で消費収支のバランスを取ることが絶対条件。ところが、新学部の発足のときには必ず赤字が生じるわけです。1年2年というのは、まず教員を集めておかなければいかん。職員も集めておかなければいかん。しかし、学生はまだ1年生とか、2年生とかしか入ってこない。だから、当然その1、2年は赤字になるのは当たり前のことなんです。

しかし、法政大学はぎりぎりの余裕がない状態で新学部をつくらうということですので、そういう穴が開くことをどうやって乗り越えるかということ、初めから手当しとかなければいかん。

だから、いろいろなことに知恵を絞らなきゃいけなかった。学費を多様化すると。これまではだいたい文系の学費は一つで画一的な学費だったんだけど、ちょっとそれに差を付けようと。それから、教員採用も少し工夫して、多様化しようというので、期間有期教員とか、いろいろな工夫を盛り込もうと。それから、やはり一番大きいのは魅力を上げて、志願者の倍率を上げると。そういうことをやれば、財政的には非常に助けになると考えたわけです。そういうことで教学改革は何とかできたわけですけども。」

44 例えば、『「21世紀の法政大学」審議会ニュース』No.4（1995年4月20日）によると、次の通り。

「2. 教学改革と財政問題について

期間付き定員が消滅する2003年を目安とした財政問題と、その打開のための教学改革についての提言が川上理事からされ、鬼塚理事から補足説明がされた。

解決しなければならない財政問題は、退職金・年金関係支出増、市ヶ谷再開発、期間付き定員の消滅、入学志願者の減少など、厳しい状況があり、33億円規模のプラスを産み出す財政努力が必要となる。そのため

沖田 それは結局、教学改革でいい環境を提供できるようになれば財政もということですかね。

北口 財政のほうは鬼塚先生が担当されていたんですか。

沖田 はい、その時は。

川上 鬼塚さんが財政担当だけど、実際に金の帳尻が合うような計画はこっちで立てたんです。

小林 そこまでして納得してもらわないと、という。

川上 はい。

沖田 星崎（亨子）さんが計算していました。教学改革本部のスタートの時、廣岡（康久）さんと伊東（利晴）さんと星崎さんと生田（真敏）さん、そして、少し遅れて私が事務室に配属されました。

小林 その年齢関係はどんな感じですか。

沖田 廣岡さん、星崎さんが1年違いだと思います。あの時の事務室の一般職は若手が多かったですね。管理職が和田さんと谷口さん、何年かして、廣岡さんが主任になったんだと思います。

小林 それで皆さん、残られているというのも変ですけど、外に出られたりという方がいらっしやらない、そういう年度でいらしたんですね。

沖田 辞めてしまった人はいるんですけど（笑）。施設部長をされた伊東さんは、早期退職されました。廣岡さんは人事部長になりましたね。星崎さんは財務企画部長になっています。

北口 皆さん、部長に。今、ミュージアムは生田部長に担当していただいています。

13. 清成忠男総長の時代

梅崎 清成先生が総長で川上先生が常務理事だった頃にもう4学部の構想とか手続きが終わっている。ただ、川上先生が常務理事を任期満了で辞任された次の年、2000年に現代福祉と情報科学が開設されて、そこで4学部が計画通り完成したということですね。

沖田 たぶん、常務理事は任期がありますから。清成先生が総長になられたのは、ほぼ申請も終わっているところぐらいですよ。

小林 では、やっぱり基本路線はぜんぶ川上先生が敷かれてという。

沖田 はい。

梅崎 川上先生だけが継続しているんですよ。あと、鬼塚先生。

北口 鬼塚先生と川上先生が同時に常務理事を辞めていらっしやって、それで、平林（千牧）先生が入って来る⁴⁵。

小林 平林先生とは経済学部時代から親しい仲

には、教学改革を通しての増収、その他単純な増収、支出削減などが求められると、具体的な試算をもとにした報告が行われた。全学的に危機意識を共有することである。」

45 第一期清成体制（1996年度～）の主な役員は次の通り。

総長：清成忠男（1996年度～）

常務理事：鬼塚豊吉（1990年度～）、川上忠雄（1993年度～）、石坂悦男（1996年度～、ただし1993年度～理事）、稲田太郎（1996年度～）

第二期清成体制（1999年度～）の主な役員は次の通り。

総長：清成忠男（1996年度～）

でいらしたんですか。

川上 そんな親しいということもなかったですけどね。彼は有能だったことは確かだけど。

小林 座談会をされているのがありましたね。

沖田 21世紀の時には教学改革の答申を書いていただいて、平林先生が第二作業部会のリーダーだったんです⁴⁶。

北口 平林先生が総長になる時は、川上先生の後押しとかあったんですか。

川上 いやあ、ぜんぜん関係ない。

梅崎 清成先生というのは、ちょっと特殊ですね。もともと法政におられた方というよりも、国民金融公庫から大学に移られて来た方だから、ずっと法政にいてという人ではないんですよ。

沖田 教員としてはたぶん、法政だと思います。

梅崎 教員歴も短いですよ。あと、学者コミュニティとかいうのもちょっと違うのでしょうか。

先生ご自身は、任期満了で常務理事を辞められた後にも、研究のほうで法政大学出版会とか、アメリカのバブルとか、まさに本業のご研究をされて、そういうのは経済学部の中で同じ関心のある共同研究者とまとめられたということですか。

川上 いや、共同研究者なんていうのはいなかったです。個人ですね。

小林 ズバリ聞いちゃいますけど、先生が理事をお辞めになった時に、次は総長になってくれ

という声はなかったんですか。

川上 そういえばなかったですね。私はもう、やっていた時はあっちから恨まれこっちから恨まれというか、そういう対象になっていましたから。

小林 功労者でありながら恨みを買ってしまって、ちょっと損な役回りでしたね。

川上 そうだったですね。

梅崎 どうしても学部間の調整という話になると、どちらかに泣いてもらうみたいなことは必ず出てくると思いますので。みんな「いいよ」と言っていたら、学部ができてないと思うんですよ。

14. これからの法政大学に向けて

梅崎 次は2004年に退職をされるということで、名誉教授になられるということになります。その後、常務理事をお辞めになった後から考えますとだいたい5年間ぐらい、経済学部でのご研究をしたり、シンポジウムとかまとめられたりということで、研究三昧のお仕事をされてきたということだと思います。法政大学でのまさに研究助手から始まって理事まで担われて、退職されるまですごく長期間の間ですけれども、最後に、法政大学とはどんな大学なのか。いま我々も大学史をつくったりとかでいろいろ読ませていただいて、川上先生がおやりになった頃の熱量から考えると、我々はだいたいバラバラな感じになっているのが、正直いって反

常務理事：稲田太郎（1996年度～）、平林千牧・金子征史・渡辺喜之（1999年度～）

なお、国際文化学部・人間環境学部（いずれも市ヶ谷）は1999年度、現代福祉学部（多摩）・情報科学部（小金井）は2000年度に開設された。

46 『「21世紀の法政大学」審議会ニュース』No.6（1995年6月30日）によると、前出の第二作業部会の第一次答申「教学改革について」の項目は「昼夜開講制」および「改組転換・新設学部」からなる。

省するばかりですけれども、現役の教職員、まさに教学を担う人間に対してメッセージをいただきたいと思うんですけれども。

小林 叱咤激励ですかね。叱咤のほうが多いかもしれない。

川上 いやあ、もう今は法政大学の状態がどうなっているかというのをあまりよく知らないから、あまり無責任なことは言えませんが。

小林 法政大学にどうあって欲しいとか、どうなって欲しいというのはございますか。

川上 そういうことと言えば、私の在職中は大学としてこうであってもらいたいという希望は強く持っていましたけどね。

小林 こうであってもらいたいというのは、自由で開かれた大学とか、社会貢献とか、どんなイメージなんでしょう。

川上 今となってからは、何とも具体的に言いようがないですね。

小林 よりよい改革する大学でありたいとか。

川上 そういう意味では、法政大学に対して愛着はありますから。

北口 先生が現役の頃に目指していたような大学に、いま法政大学はなっていますか。

川上 いやあ、もう私が大学を辞めてからそうとう長いでしょう。だから、大学が今どうなっているかというのをあまりよく知らないですよ。

梅崎 具体的に先生が改革なされたことの延長線上というのはあると思います。先生がお辞めになった後に、例えば2000年代後半とか2010年代に向けた新しい理想が出てきて、それに対して改革をするという流れは、正直いつてないと思います。もしくは、理想を持っている人がいたとしても、先生が現役の時みたいに

学部を超えてみんなで議論していない。何もしないか、もしくは自分のできる小さな範囲で、ゼミをうまくちゃんとやろうとか、やっぱり部分最適というんですかね。大きな、みんなで話し合う土台みたいなのをつくってここで議論しましょうよというのは、今はできていないような気がしますね。

小林 2014年に、先生にお話しいただいた法政学研究会というのは、「法政学への招待」という法政大学史を学ぶ科目が土台になっているんですけど、あの時の「明日の法政を創る」審議会は、そんなに多くのものを生み出さなかったですね。法政学はできたけど。それでいうと、大きな改革で全学的に話し合ったものが結実したというのは、先生の改革が最後かもしれない。増田総長時代の「明日の法政」以降は、そういうプラットフォームすらないですね。それでいうと、田中（優子）総長時代はブランディングで、法政大学のアイデンティティを確立しようということでミュージアムをつくったりとか、「法政大学憲章」というのを、大学史を振り返ったり現状を調査する中でつくったりはしていますが、それは教学改革ではなかったですよ。だから、150年史のハイライトは先生の時代です。

梅崎 これも小さいプロジェクトですけど、でも我々、学部の違う者が集まって法政史を書こうと思っています。

沖田 でも、川上先生と一緒に21世紀の審議会をやっている時には、学生さんとのティーチインとか討論会みたいなのもやりました。そんなに参加がすごいたくさんあったわけではないんですけど、関心のある学生たちが来てくれました。変な学生が来たらどうしようというのもあ

りましたが、そういうことはぜんぜんなく。あと、市ヶ谷再開発の建物についても討論会、ティーチインをやったり、鬼塚先生がそちらをされたり。そういう意味で、学生も入っていたり、あと卒業生とかからも、どういう大学になって欲しいかみたいな、21世紀の法政大学についての懸賞論文を企画して出してもらったり。それも、ものすごく来たというわけではないですけども、一応こちらで選べるぐらいは来て、優秀な方は表彰したりしましたね。小林 それで言うと、職員もですし、教員のいろんな学部アイデアもですけど、卒業生、学生も含めてみんなを巻き込むシステムをつくられたという、そういう時代だったんですね。それは先生、意識して多くの人を議論に巻き込んでいこうというふうにされたんですか。

川上 まあ、かなりのところそうだったですね。

小林 先生、アジテーションが得意だったとか。

川上 アジテーションは好きだったです（笑）。

小林 若い時から、人心掌握力を鍛え上げられたんですね。

沖田 21世紀で多くの課題が突きつけられて、解決したのはもしかしたらほんの一握りで、まだまだその続きをやっていかなければいけないのかもしれない。

梅崎 その時点にもう一度戻って、「21世紀の法政大学」審議会の時の議論で今どう違うかみたいなことを、みんなで議論してもいいのかもしれないですね。

沖田 あの時、川上先生が挙げられた問題というのは、テーマとしては永遠のテーマですよ。

小林 2004年に『法政大学と戦後五〇年』という、飯田（泰三）先生たちがまとめられた、この本に川上先生がお書きになっていることが

今のと変わってないです。まさにその通りという。

沖田 その時に書いたみたいな大学になってくださいということですね。

梅崎 長時間になりましたけれども、どうもありがとうございました。

（終了）